

七部婆心録四卷

曲齋注

○瓠集

伊集院の爲に

飛出たに之縁三の夷祖箱
 杖之樹幸子止れおろく除夜の言は迄
 て撰集おろく凡洞凡去日二似て最忠言
 多し一吾仙五言始元化又より吾草と流け
 博下と歎一鞋を挾て田原の老をみりて
 袖とて夷州の老を歎と過さる換振れ之
 之衆老の跡にまゝ之傳てカ何乃の字新きを
 見付てカ端作すきを志りてカ外老の
 二字歎に合官う寸さそそ夷子夷地ト
 歎せむも白きまけ守又濁跡トすり肘を
 白きまけトへれと花又よみ全さるれ子毎
 歎うて並むじ又才の老ま箱の老を出一
 才二撰限そ後三三箱の老を書りも只
 撰振て老箱の設あぬれ一却て集の

七部

四



擧げざるも千妻万化あり擧老とすむ
 人いふそ覺悟すきさるまあむ或人難日先
 集ありの席評又因比も各よく行條を
 けられ擧集あきとも福の事を遊てま
 けりといひ爰より福の心をあきもける福の
 汲ありといふまのふりてを擧よ進也
 てもあまきもあるべき程ありといひ天をく
 今文略と批む〔宇世遠〕許は日名吉やの爲ち
 敵人あのは目陽くるは似れといひこまを
 入れ湖南の連流さるみの了國と居れる
 する其時程は其風をけすて血脈をけうぬ
 ちまあり群先勝の手傳う擧老の号を
 多あり人天晴化者と又えて其人何と
 あく床一きま歩進化の後ま集集を
 て下身の危を出一初んは初るくしは
 丁き高分故人号あり我は独歩を許あり

嬉さる乃とも踏ぬけりと思ひを就ま
 祖翁のかごを採り子始て老實の後〔後〕如
 不終しるを許子出傳て後生を戒りけ
 新も実ありて五老法を同社の用知ま
 除頑我は胡然乃爰と是下りを

花見

木のおまけを鷲もけりてか 菊

木のおまけてスル二けり然し許E至聖擧くりカ
 テ自づかは句ももろまは皆まう同り青も
 作る時辰もけりは方余情もあるけけを
 面は作るへ寂と見え國木の下の根ねすれ
 てもうの山花の食を思する去んは西行の身
 を擧より片〔南〕又よりけけ然の味も一入
 揚るとなるは擧るまありす其証とく

○ 西日長年よまて天あり 除頑

女ウウ体と云ふは又子持の用をたたり初日
作らばしよさ大徳く妻をもちやて初日
として月子司なりて是も子く初日との
觸る古今未考なりやお上様のことより
も是方ホウ發動と血脈、ぬてた子の白
造と指之○國大書母金の時中田より母指
美白細長坤象之ハ十月を初日あり付
吉の内裡兵糧之川れは云付まひり
二日作する指を授象之

□ 鞆と云ふ三葉約は秋の末に 鞆
鞆のまひりき白丸ゆむと待めて七つぐ件
志す人の仕具をたたり鞆おりの三葉約
は秋の末に大いんをやうたおと鞆を
三年らう子育長でいさるいどうらくぢやモウ
秋来て待れぬおまひりきくまひりて末に
は今潤とせきさるれんはと造象の白を

身子仕立上る指の運び之○臣儀わを登り
るもはあえ換の位は臣儀はさるあまは
終り也

■ 欠をさへくは降るるるあ 次
鞆の鞆おくるは秋の末に余の長途をい
件は是より上り眺るは秋の天を待たりは
は降るるる人おるる村ものりきさるる
是始の妻もよりおむるさるるはあかとの
おはふれ 換中の心さるるはあかとの
の長い髪しと能因の長形政の妻持もは
て候するは身人の情之○法道高時も又時
は二白は之○子の菜葉子三葉子を毛を
んて名もさるるはあかとの

■ 入込は飯宿の桶湯のタタレ 水
是の名指は身宿は同一をさるる人指は
初日圓満と云ふは身人となす入込は飯宿の

おとこをわけてよ夫と志ぬ母我の心切とあ
指さしりあぐ思つておのこころの物の中あき
中もそよは枝の使あつと思ふ風情

○月入る夜乃袖をききあ 秋
あもおとこをわけてよ夫と志ぬ母我の心切とあ
指さしりあぐ思つておのこころの物の中あき
中もそよは枝の使あつと思ふ風情

秋風の舟をまよふる伎乃き 水
あもおとこをわけてよ夫と志ぬ母我の心切とあ
指さしりあぐ思つておのこころの物の中あき
中もそよは枝の使あつと思ふ風情

あもおとこをわけてよ夫と志ぬ母我の心切とあ
指さしりあぐ思つておのこころの物の中あき
中もそよは枝の使あつと思ふ風情

あもおとこをわけてよ夫と志ぬ母我の心切とあ
指さしりあぐ思つておのこころの物の中あき
中もそよは枝の使あつと思ふ風情

業の尸也く方や身不業内の地を昆々作支也他
 又の基を用き分り千部とむむの書乃一乃田ハ
 千部と基なる他田人の事也より白子の方々
 陽の尸を携ぎ一乃田の也く方々支借方の也
 左不を白子若松辺より来る傍に千部す振の
 一乃田實正中下地言田より一乃田は後で
 本山と千子千子千日西中百宮下十日の君三
 尸體之部より毎三日月傍る人そ執流す
 上白と本千ア中千アトとま千アと号
 支也より千日の外経千アあり一乃田
 ちきく時尸もぬ法会も始る振共並む

■ 順れ死る乃乃 陽を 水

業の千部と花蓮學師感ある佛法を我人陸去り
 一乃田は五又經文の教也を行より順れ死る乃乃
 陽を一乃田難中之難也過其難はとくく
 一乃田はあひて本教を信する一乃田はかきき

るふふ何とそ千部とあちやと由然一乃田
 れの安きい束ては法はあちを死に際む一乃田
 陽をのうき世もいと宿縁なき人さる一乃田
 我て秋若縁をむ殺る拾一乃田於順れの
 死すも法会はあちとあ乃乃と果一乃田
 一乃田と後去千部の法也

■ 何よりも情乃 死そ哀あり 痛

業の順れ死る乃乃は陽をを執する一乃田
 一人ふ愛の世ある執想を行より一人は情の
 傍に葉村は陽ををわら暖あり一乃田は文也情
 の着わらとてあちらく一乃田周夢為胡蝶
 栩栩然胡蝶也自喻適志矣不知周
 也俄然覺則遽々然周也不知周之
 夢為胡蝶與胡蝶之夢為周與周與
 胡蝶則必有分矣一乃田とく順れ死る乃乃
 一乃田の法をさすはせれて一乃田の死れは苦

其の能事とて、後其法で押止付て其人
 之儀情を述べり、其未古紀の冥ちう板よりハ
 沢も出入す我意は是かて防止る乱る世の
 其指へ△能事訪といふより紀の冥ちと其
 其し因ま未古の木の栲河紀の冥ちの和泉の
 境の雄山の冥ち山口左司次郎といふ其
 其らと持多り、○平家の落人其とて
 て源氏方より冥を構より其あを公家の
 能事候とて是なる位也

□ 石で兀くり天急あつらむ 水

其の能事ハ余有伝友の海も用ぬ男とて大ゆ
 とせたり石で兀くる天急あつらむ大ゆすか
 と常々冥入りも旅は用ぬおまのてく兀
 とむと冥ちの友乃哉字の指へ顔字を
 其証より○其強くみきとて石
 版とけり其換象也

■ 乃六の目を歌くを考りり 石

其の能事ハ乃六の目とて天急あつらむ其
 祠とて其目あへ改実行も用をけり乃六の目
 と歌くを考りりよも其考むとをひきあ
 りうち終は考て老服は又え其の取ねあつ
 てく向ふ俯て又る改せえとて其考よう
 其を能飲兀りりと冥ち指へ○其終
 日乃六と出する情をりて乃六へき人の其味
 をけりり其考とて天急の老とて其考や
 りの日よあつらむの考とて因名物六帖兩人
 乃乃自朝至暮不已傍觀者亦移日
 不去の記は其考換象也

□ 乃乃持佛よむる念仏 石

其の能事ハ乃六の目を歌くを考りり其
 又其後の用をけり乃の持仏よむる念仏
 といはざる要の法用勅めむと本考より其考へて

念佛する草庵の振出家の本情教ていと殊
務之〇因老人の情教よ看経をけりハハ
怪也之あふよ老の振い

■ ちうくよ土るよ居れい蚤居い 水

▲あむ仮の持仏形をうりある画像をさる貧僧
上之立念是情を迷うりあうくよ土るよ居れい
蚤もあーよ大地よすじ傍の蚊も業
障の蚊も妨らるまを土るよすじ方の所じかく
井の乃をちよ修するよと大悟の胸中を
述りり因持排水和為大悟よある家の形よ仮
のさーをて皆作て美る時或人又子の老を
るを憐れや大悟のほ陀を与一る又子居
よをて消戻りて棟れと高を守るや何
くく後後せねむと思ふよよ土居い侍也

□ 我名いアのあふりきあり 霜

▲あむ古々々 ヨリモ都て土るよ居れい蚤も

あーと巻たよ立又次の詞をけり我々
をアのあふりおあやよ大悟の逼迫者か
らむ世月の人よりいんも実言らむ笑ても
あふりても欲極楽飲ぬい地獄下戸の立さ
る我もああうたをけり子居之〇因已ら
才と居他何房よ等て世を教弄する人日
アを美佛をよ地下一統る麻よすは悪夜良白
はモ かうくよは阿のすぬぬ

■ 怪きていぬ踊のねさ夫 依

▲あむアのあふりおあや大悟の申よ実念よが
伴よ立又用をけり怪れて入ぬ踊のねを
美人れもせぬるよせ落よる踊再あむ人
振との美念よをさてああれも怪れて
もねりてすてい踊よあふりてせよる振之〇

● 月歌くよ明はる月 水

老翁の傍に坐す手の付あはるを比ぶる作
 又立毎扱採すは骨をる根をけり△
 をあ大岸人のセワやくト又てい妻の愛い
 老人の若老ニ傍れて入ぬ陣の形を羨すト
 リクカレ件ト團圓ニ又立□老翁の杜乃月も空
 めすト其をかりむ○陣陣は張す云出さる月
 空るをうりよまをい只終り之起て陣陣は
 正風の去面目は白い大方京氣のや白之又古
 相の余嘆まを白くす又白い時起情之水
 をりりと入大と入る天を勝息の境美ある
 故に口くつそは連あるいある感も□懐念
 あり毎扱採すは骨をる根をけり△
 □花房余扱採すは骨をる根をけり△
 老翁の月おく岸秋のる色く件ト又立陣陣は
 廣理の指をけり△
 老翁の月おく岸秋のる色く件ト又立陣陣は

枯て文也く秋の哀さよと思やち扱之○陣陣は
 老翁の月おく岸秋のる色く件ト又立陣陣は

● 只に方ある草尾の意 石

老翁の月おく岸秋のる色く件ト又立陣陣は
 老翁の月おく岸秋のる色く件ト又立陣陣は
 老翁の月おく岸秋のる色く件ト又立陣陣は

■ 一費の神むわくと返り 水

老翁の月おく岸秋のる色く件ト又立陣陣は
 老翁の月おく岸秋のる色く件ト又立陣陣は
 老翁の月おく岸秋のる色く件ト又立陣陣は

みだりさされて何うもよあるやちと出煙の
老の笑へる区とあつらんを迷ふ人ばきと
珍田也の志は子孫に傳へり

色々の名も マキウハレ ちりやまの州 隠れ

世葉はちの他世の意味を良人の他世の名目
孫ちとて良人も之 世葉三冊 孫ちとて良人も
よは後まかちまされむ孫ちの方作す

■ おきて世のちめ カサハレ ぬる 翁

▲ 赤白とこの名も孫ちとまきま又ゆる取葉又
と良良をおせけり打れて世の月とまきぬる
よ何れの草うやとまむとひく死とて居つ
くもろこは活き草まほれこもろとまきし拍
世葉三冊 目とまきぬるト 孫ちとて良人も
ばあれい月とまきすは方す 妻は止りこり
世のちとて孫あむむくと再根あむいとはし

は孫の神年休め保まあり

■ 脇隔の長年長らるる出で 活通
▲ 赤白眼とお目打れて世の目とまきぬるはたえ
ま門しせれとせりうまありの世まは敷ささ
出でよ脇隔のあつあつこの目して強まをりて
眼も傍と世の目とて死とてして利純と説
る始と

■ ち乃通ぬ 評 裁 切

▲ 赤白脇隔のヨク世葉まきぬるを死出で赤白と
まて人とせりうまの通ぬは評裁切りトを比
定ますむまきと脇隔の悪相穢医志之通評
村ま揺れ活てまおと出らる脇隔すむ板中
の山穴辺のちの通ぬは揺れぬち乃通てあり
一乃と通ぬの志の女持柄と准とて実を拾へ
○よりハルイト改

■ は子孫の笑と痛罵 マキウハレ ちりやまの州 隠れ

集の如きの通ぬや十許成て入里は物接合
 直承は妻て休む振とたり志その実とかり
 つく多かれふ幸して許成て氏家より
 又多めもの市出の如き持振の如く
 けり入りの振り通ふと我れ多るは此
 □ 親子並て月はおくふ
 集の志その実とかりすはくく方考せハシ
 キニは河と又立又次の詞とたり親子並て月
 はおくふ振せし子と月と持振は連出せ方
 も傍より振せとては用きまは侍も事已
 去月又て振せは穀漬の如くとむら振て
 此より振いとをり

□ 秋の志宮も取を給り 通
 集の親子並て月はおくふは振せ田舎と
 直承とふ振とたり 十代半侍 秋の志宮も取せの
 ありよ大落宮ある振中ありし月持あり

承は病つむと侍志の心差あるを宮も後
 より取せのへて是振は二取とかり志と又
 き風情のなり三は前後は侍なり改り

■ 去そくれては笑ふ面 新
 集の秋の志宮おなまつく志やすむと次の
 万と宮も取せ給る体と又立又執とたり
 振れては笑ふ侍はは平痛る彼方相同
 のひびきの歳ありするれ取又あす持合
 居られいさそと侍は笑もあふ又一人侍
 甘あむ侍字傍る

■ 移馬の相織とそより色て 取
 集の振れは笑ふ侍中の悟り又立余
 の志の取振とたり 移馬の相織とそより色
 てよけ移馬のまや侍と咽振と持れ
 相織とそより色と侍たりも相持振

■ 小六佩 市のかくさ

余の移香の相識とそよ老懐きは行よる
藤原上之守はきりしと行なり小六洞て市
の如きよは比もゆる小六洞洞つとめり
て洞を長短し○小六洞まあれいでと改く

○ 小六洞のちきくはあ川の端 通

▲ 余の市なき洞つと相識の件とそよ老懐きは行よる
と行なり△小六洞の身は源なり一室よ小六洞市
の洞さるや昔は洞とそよ出取く去世の御も
止道の指てと又極老と説する指と行く又
洞でさる人々洞つと相識の聲とそよと行くとそよ
鼻声は洞も比は洞つと改く

○ 念佛中て相む洞つと改く

▲ 余の市なき洞つと相識の件とそよ老懐きは行よる
と行なり△小六洞の身は源なり一室よ小六洞市
の洞さるや昔は洞とそよ出取く去世の御も
止道の指てと又極老と説する指と行く又
洞でさる人々洞つと相識の聲とそよと行くとそよ
鼻声は洞も比は洞つと改く

○ 梅一葉もろれ守年の暮る 石

▲ 余の市なき洞つと相識の件とそよ老懐きは行よる
と行なり△小六洞の身は源なり一室よ小六洞市
の洞さるや昔は洞とそよ出取く去世の御も
止道の指てと又極老と説する指と行く又
洞でさる人々洞つと相識の聲とそよと行くとそよ
鼻声は洞も比は洞つと改く

● 花のつと乃大よおとされ

▲ 余の市なき洞つと相識の件とそよ老懐きは行よる
と行なり△小六洞の身は源なり一室よ小六洞市
の洞さるや昔は洞とそよ出取く去世の御も
止道の指てと又極老と説する指と行く又
洞でさる人々洞つと相識の聲とそよと行くとそよ
鼻声は洞も比は洞つと改く

□ 振寄雅き人乃 姫連て 通

▲ 余の市なき洞つと相識の件とそよ老懐きは行よる
と行なり△小六洞の身は源なり一室よ小六洞市
の洞さるや昔は洞とそよ出取く去世の御も
止道の指てと又極老と説する指と行く又
洞でさる人々洞つと相識の聲とそよと行くとそよ
鼻声は洞も比は洞つと改く

達ありやと三人を尋ねたる是れ社の侍を
申す人々のあはれと懐くは船の運行

○ 花も赤いよ月も輝く 通

▲ おもひで学姫の稚子をたじく連あそび侍と
又月をたぐり花も赤いよ月も輝くは彼方乃
ちと指さしは方の月と指さして定處の指さ

○ 再臨 船はたげり 扱ふる一舟もちすあ
後の付れもすえす

■ 汐のさす様の下を和日あり 石

▲ おもひ赤きむはうきくとの盛さう有るを
侍と又は又侍の系をたぐり汐のさす様の下を
世系ありはに方社眺むすきよは棧道の下を
世系ありはに方社眺むすきよは棧道の下を
て委ま候て委まある格は水之國和日あり
こよもよ降のりあれは委ま

■ 生船ある道乃去り

▲ おもひのさす様の下を宮庭の庭上又
侍の指をたぐり生船ある道の去りよ毎
三月廿九日天神の山連身は船千枚用は候
とてよまの連身侍の秋刻す指は船乃
船を候て是は連身侍なり。又の連身を表は
ちし「生船」は目と号す身人し候はすきを
船のく表はし作るは候なり

□ は村の廣きま医者のありは 為

▲ おもひは余の生船の自由あるは指は浦の自由
をの侍は余の生船をたぐりは村の廣きまは医
者のありはは 列の生船のさ食は某は計
よと強はれは備医二人もあはれは秋をせし指
よまの人ありははにハハニのん

■ そろり整おけはわかとりは 秋人

▲ おもひは村の廣きまは我り外に医者のありは
初臨はまは文次の記をたぐりは浪人あるは故

あつた山のまゝ白く又あつた山をあらわすは河と
又またあつた山をあらわすは河とあらわすは
きの月乃新の宿の入口の茶店は麴梅のまゝ
するをあらわすは河のうらと人あはれ彼方のまゝを
くとおとすは河とあらわすは

□ 李をわつ子乃皆裸む——人

あつた山は月乃新の宿の入口の茶店は麴梅のまゝ
あつた山をあらわすは河とあらわすは河と
あつた山をあらわすは河とあらわすは河と

□ 孫や蘭も也とちとあり

あつた山をあらわすは河とあらわすは河と
あつた山をあらわすは河とあらわすは河と
あつた山をあらわすは河とあらわすは河と

■ 又孫乃ちも孫物も孫人

あつた山をあらわすは河とあらわすは河と
あつた山をあらわすは河とあらわすは河と
あつた山をあらわすは河とあらわすは河と

■ 孫加減又と出東

あつた山をあらわすは河とあらわすは河と
あつた山をあらわすは河とあらわすは河と
あつた山をあらわすは河とあらわすは河と

□ 何ともせぬは孫物棚人

素白新らむ又と出来しおぼしき上管屋の件は
立初と云ふ事なかりし何れもせぬは是れ約柄人
情に業成て約は上管と何の拍子より約
房を依てそあくあえらむと依り情なきやせし
悔む拍子〇三ハ。ト云まは依り

■ 世より叔のさうり成て笑出守 今
素白何れも早守は是事ひよめ盛傳也く村柄は
体ト云は叔迄せたりし世より叔のさうり成て笑
出守ト云は約柄は天宮さちりし世より叔は是事
拍子ハ世より叔は是事は是れ俗通なれども世
房より世より叔は是事は是れ俗通なれども世

■ あより叔と云ぬあーして、
素白も世より叔は是事は是れ俗通なれども世
ト云は是事は是れ俗通なれども世
ト云は是事は是れ俗通なれども世
ト云は是事は是れ俗通なれども世

本意のきかしてあとへゆるとは是れ目覚し
人の情よりて笑出守拍の逆行也

■ 仁の房をかへて衣をえれ人

素白アヒテ否カタトあより叔をえぬおては
体ト云は是れ俗通なれども世
と云は是事は是れ俗通なれども世
いよめり素白は是事は是れ俗通なれども世
依て束ねしと云は是れ俗通なれども世
いよめり素白は是事は是れ俗通なれども世
せて世より叔は是事は是れ俗通なれども世
後出給へて又あより叔をえぬおては
後出給へて又あより叔をえぬおては
と云は是事は是れ俗通なれども世
と云は是事は是れ俗通なれども世
と云は是事は是れ俗通なれども世
と云は是事は是れ俗通なれども世

は擇せしはれあかりてはらるるを世に傳は乃
もよくあの本屋で思ふはねく袖は古き
只合て空押の爲度す。指之合あひぬる女の
息も又寸田方の御指あるを定い遊ていありと
新し廿の後物のみよとてうの因世徳お清本
院の侍はと平仲意義あぬも文きうられいさ月
の元くあさきれて隠る今もあもあういあ
うあさきむと人のを念をうしよは分入て取
よあう賢換あとするは侍は隠るさ中戸の是
念を忘りてとてきうお打投てりしとまて
ともく東寺平仲は悔度い五月あうも多
うあうは故る遠く火敷を又て後の事ある
そ侍は又うそい付れも厭あうい

■ 志きりりよあい打あけてあう 人
あま白息せき一汗は成て干衣抱ふむ終ま
あうい侍は又志支拂の指を分りり物よあい

おあけてあうはらりいよも天部あれてと虫干
も粘付りぬ多物りるを傍は夕きりぬあ
てあうのき大行は成て引ようく抱ああとも
干物多く車軸は強し又終まはあうい夜
と徳付振つぎと畜は強きよあうい物す
あうい侍は又志支拂の指を分りり物よあ
分るるあうい侍は又志支拂の指を分りり物
あうい侍は又志支拂の指を分りり物よあ
あうい侍は又志支拂の指を分りり物よあ
あうい侍は又志支拂の指を分りり物よあ

□ 花は生又百人乃指ちてい 今
あうい侍は又志支拂の指を分りり物よあ
あうい侍は又志支拂の指を分りり物よあ
あうい侍は又志支拂の指を分りり物よあ
あうい侍は又志支拂の指を分りり物よあ
あうい侍は又志支拂の指を分りり物よあ

は成て暮一人も又こされおと上端ねと祀の
換りけりと強う振の連なり

□ まを後とそ只まざる旅 兮

▲あり指立身花笠よ伯多き老地辺の宿ト
又立接人の情と迷入りまの振とも只ざる接ハ
大なる扇よ伯て持たふるよ又而人曰打束り
とそま子よ指立り物持指立く手馴く
おと手と旗のらさる打志て又高なる振と
△はまを集中分と

城下

狭地乃きまよる和月山 地径
内陣下と指立身と波せむおの強き之教と
波終てま子あむむとやわりなり

● 砂乃小麦新瘦てもしく 可東
▲ありまをまよる身と波廣き指立古橋よと

新栄畑を分り △は細星その姿あり 安ん位吉
仲の丁打上又立 □ 展を陣おせ波の宿海松トセハ
狭地トまをまよる身と波廣き指立

■ 西風よま子不乃小貝拾をせて 泥士

▲あり砂の小麦の瘦てもしく 高スル体ト又立際
辺の用を分り 西風よま子不の小貝拾せてよ
西風さく麦をしくとふく日浦たす振とま
すかの貝の春れい西風の風りて方之振を分り

□ あまぬる一ツ黄うみこり 乙然

▲あり拾せては余白風吹は終日茶臥る体ト又立風
ま咽の軟く振を分りあまぬる一ツ黄うみこりよ
又辺家一おもおれい浦まおの門はうてををすも
不まをまといくせむと也案するもあて着中ま
貝拾よ出り人あむむ

□ 其巻津二人走くるおぬり 娘誰

▲あり不換極さま葉もはをぬ体ト又立まらむ換

由にせり基津二人きりなるおぼしき家内
 いひし大もきあり茶瓶も泣く比年子声らし
 おう主の身えある大津引もきり旅の辻行
 ■ 秋乃秋妻のお中死声 孫死
 夫の字の余句基津はきけ只ま寸おぼし
 成ておと付し又ま二枕する用を討たり頑よ
 基津するい地張法き付くおお登博の合
 又束て横母の基を始只ま寸寸おぼし
 おくお中の通をいひしおぼしおおあきや
 といし声も終る時良もまもあけしとやせ
 又おおはきき年の年して一丈子の物さきおむ
 とりりといふおぼし出仕の支放するおぼし

■ 女房花心細くし寝られて 首

夫の秋の秋妻のお中の声き 虫病人の弦打
 声ト又ちお怪の根を討たり女房むん細りよ
 寝られて 八原氏貞 姫八月十日の秋夕敷を侍て

同床院は臥む枕上はさ条の虫のせを呉出で已
 めてとくと又身をいひもおおきとくの人を
 て時めりぬきと目まを恨て又夕虫を
 起す妻は寝あき大津引りち力抜きて太
 座を起し虫病をて大町させよと宿とて
 乃り寸夕虫悲いしくいひき感ぬる原氏貞
 出で起ぬしは原の夫も泣きけ院の秋の子
 又ういひし一人夕虫の夜をうそおぼしめ
 いひ言て起り紙燭を弄れ夜も法打し
 声作れと修れ御火打て又あきまは又女
 の依立席を夕虫もや寝合へて人む惟光
 まきめいおとす原氏貞一ツのうきま迫
 る指とあきの志田の月の村の秋の秋の
 ○因捨遺葉は葉の時良おねとあて行け
 るよまきと目まてとよは時や寸人丑とや寸
 こそ人丑と今んれすよと云やうれおね

移りまゝに又也やと持てよはらうと連なり
り付只 秘教字又處に團圓れなれはてり

○ 目の内をく又やり持ある 径

素もん神を秘されてあかす体又他より各体と
あすの指を付くしと怪の口をささるに指し

愛の泣を起し女形もある世よりそ女の西を

秘されてん神を体とえ立「さう世の事さうそ

まき袖と今昔お借返刺の体は変化して

愛死の情捨つあむ准えを込糸と入る定

法はやりあまうるさく持たり

□ 乃も亦何系性をよく見え 東

素も目の内をくれとおえや持は病を慰する

体又立書書持の指を付たり乃も亦何系性を

よく見よ宮川下木谷町辺の貸屋をあるむ

そこの何系性を持候より受て乃も亦ん系乱

は少から受の指しとあむを指しりたり

■ 教をりきせ生付あり 士

▲ 乃も亦何系性をよく見よ末に受て体と全書持

へを付たり教のをりきせ生付ありよ宮谷へ

お祭のちりれよある男ありむいりも面白き

人ごと女子世のまてあ付指又也

□ 乃も亦何系性をよく見よ末に受て体と全書持

▲ 乃も亦何系性をよく見よ末に受て体と全書持

へを付たり教のをりきせ生付ありよ宮谷へ

お祭のちりれよある男ありむいりも面白き

人ごと女子世のまてあ付指又也

さそを系するも受たりむと又おの母く指し

■ 一乃も亦何系性をよく見よ末に受て体と全書持

▲ 乃も亦何系性をよく見よ末に受て体と全書持

へを付たり教のをりきせ生付ありよ宮谷へ

お祭のちりれよある男ありむいりも面白き

人ごと女子世のまてあ付指又也

夫せりくはわし只苦くは結痛ふふく
乃程て氏并指さき田の神社に寸と裁いふ指

■ 又おられて岩屋まはも止れす 士

▲あつて一里半山の下州スルニ遠感スル体ト又山
は降りし入をけり又志すは岩屋まはも止
ますよふあつて山の奥へて栖よれず不れのさ
うといふ引引置へる木食めじ大勢の山子ま
又けられし化およと幸きめよあまじとせりい
いらあじいおの中よすまをう世のうさる中
ウス東さむトお恨くるお指ア也

■ せれ世も候ふと去られと 車

▲あつておられて格が岩屋まはも止れすト世
体と又置居人せけりそれ世の候ふと時とよ
あの出徳の初合より任訓初も候多く乳母ら
也縁の思念の望まは暫き候 さまよう不勤
集ヤ一人は又おられてまは思うて或るよあし

時を来ひ或は風湯に控候と木も草ももん
是つぬに美枝の方へ居ゆく指し女又中ま世
はあもとり次は常の世まをり○因日指上人
望の思念して初合の昔の思念の候き候の
るのふれEさあきし御んは揮象也

□ 両車まの。裁の指女おきさうよ 径

▲あつてあつと時とほう世は繁れて涙は袖の乾く
あき体ト又直うさ初せけりそりよの裁の指
女のまさうまは指寫車の中よ袖後ておそか
とけたる次母をえてもも時とあもあまは
も休ふ日あくんは遠ぬ客ともも寫車乃近
の指舟あつとと心やも指し

■ ままあまははあく丁百乃指 抄

▲あつてあつと時とほう世は繁れて涙は袖の乾く
あき体ト又直うさ初せけりそりよの裁の指
女のまさうまは指寫車の中よ袖後ておそか
とけたる次母をえてもも時とあもあまは
も休ふ日あくんは遠ぬ客ともも寫車乃近
の指舟あつとと心やも指し

方へ寄身代は分殊は我身のみそり術と仕
命をさえて田舎女席の貪まきまこと異人
招く因おまいたる通用なり

□ 月老は念ふをよめてさふせ 歌

▲ 翁を御費くき幼化人の集命をさす更替まの
さこそ行なり月老は念ふをよめてカッテさふ
らせよ橋の節化もまの寄加し村中らあて
きりてあふさふりまふふせて出させ是て丁
と異なりと勢よく招の運けし△よめて下カッテ
は初を念ふなり

□ 若夫保孫性の幸さるる歌 歌

▲ 翁の月又む又月法屋の宅命をさすさふり
件ト又さ加て迷惑の招をけり若夫保の極乃
幸なり下厭ふ手喚き田舎の法屋おむ且那
まの未あま三十一カおそぬ友を招かぬ毎
る会合すれもりも極幸初理り困あう

匠屋にりさふりする招の介も用ある医師や
手招師直のれおむ△月老を起て其家よさる
るよめて迷惑の情は特なり

■ 東の妻は抱も初忘るれ寸 歌

▲ 翁の極幸き風去さ忘れ妻人ト又さ極忘の情
とけり東の妻は抱も初忘るれ寸ハ幸家
と長はまきさる人あむむむ自由あるひかの作
位何は抱も初忘るれ寸風情

□ 東の遠の情を位出れ 歌

▲ 翁の初やぬ人の来ま去初やぬ人ト就て歌
りさる件ト又さ其人の歌をけり東の遠乃
情を位出れハ味情抱へ巴より後は更さる
本情の皆出世は相倫ま上承するをさるま抱へ
は位は位はさるさるま中も亦長あつぬ振く

■ 飲まぬく居居のあれは一強 歌

▲ 翁の酔程不ま初遠の情を位出れ寸件ト又さ振持

られ、指さすなり、次より、左の、おれの一、
 八、中、の、同、宿、坊、と、我、も、連、り、お、と、先、
 日、も、遊、び、て、い、ま、遠、く、い、れ、い、れ、寸、と、振、持、ち、
 を、受、て、出、立、り、る、指、の、足、付、と、い、ま、の、遠、く、遊、
 び、ま、う、り、お、と、馬、お、と、才、と、う、り、る、遠、く、
 一、古、き、情、妻、の、殊、る、懐、念、 徑、
 一、お、も、た、は、の、お、お、馬、お、仲、り、の、殊、と、い、ま、
 抱、る、用、を、分、り、古、き、情、妻、の、殊、る、懐、念、と、い、ま、
 何、と、い、て、連、を、強、く、と、く、又、何、の、情、妻、あ、い、し、お、
 抱、も、ま、れ、う、と、抱、る、指、の、因、縁、池、に、一、才、持、
 目、持、お、制、禁、の、中、あ、り、古、き、情、妻、と、い、ま、
 一、○小本のころは、後、ころ、**團**、ころ、と、く、お、
 ころ、ま、そ、の、え、と、く、

一、時、く、も、る、姓、を、も、お、あ、り、て、 誰、
 一、お、も、古、き、情、妻、の、殊、る、懐、念、の、中、あ、り、て、お、お、
 去、り、と、い、ま、帰、り、ぬ、指、を、分、り、時、く、も、る、姓、を、も、お、

一、お、も、古、き、情、妻、の、殊、る、懐、念、の、中、あ、り、て、お、お、
 去、り、と、い、ま、帰、り、ぬ、指、を、分、り、時、く、も、る、姓、を、も、お、
 一、お、も、古、き、情、妻、の、殊、る、懐、念、の、中、あ、り、て、お、お、
 去、り、と、い、ま、帰、り、ぬ、指、を、分、り、時、く、も、る、姓、を、も、お、
 一、お、も、古、き、情、妻、の、殊、る、懐、念、の、中、あ、り、て、お、お、
 去、り、と、い、ま、帰、り、ぬ、指、を、分、り、時、く、も、る、姓、を、も、お、

一、お、も、古、き、情、妻、の、殊、る、懐、念、の、中、あ、り、て、お、お、
 去、り、と、い、ま、帰、り、ぬ、指、を、分、り、時、く、も、る、姓、を、も、お、
 一、お、も、古、き、情、妻、の、殊、る、懐、念、の、中、あ、り、て、お、お、
 去、り、と、い、ま、帰、り、ぬ、指、を、分、り、時、く、も、る、姓、を、も、お、
 一、お、も、古、き、情、妻、の、殊、る、懐、念、の、中、あ、り、て、お、お、
 去、り、と、い、ま、帰、り、ぬ、指、を、分、り、時、く、も、る、姓、を、も、お、

舟の團圓は後下因檀浦の休也也

■ 連も力も皆な成あり 舟
ある多然声ヲ莫成る舟幽冥のあやらし
下流舟と足道後病老之分り連も力も皆
な成ありトハ後の病をア候言方舟幽冥
なれ伯ぬと吹とを成るをぬ今一病然
伯むと候乃よかるおや候言声の雪先
候候候と目の足ぬを思ひ及多く候候
連も皆な成あり皆弱く候言思ひ候
候候候の幽冥候候候候候候候候候候

■ かつ凡の大岡ち運道吹通下 行

言も皆な成あり大勢成り金文より候候
又候候候候候候候候候候候候候候
一列に運道吹通下候候候候候候候候
候候候候候候候候候候候候候候候
候候候候候候候候候候候候候候候

寸度一何尺候候候候候候候候候候
飛山候候候候候候候候候候候候候
出候候候候候候候候候候候候候候
タイコトと候候候候候候候候候候

■ 虫張の志もよ用かあり 候

言も皆な成あり運道成り市出と候候
ま子候候候候候候候候候候候候候
ト秋居候候候候候候候候候候候候
候候候候候候候候候候候候候候候
候候候候候候候候候候候候候候候

□ 糊張き扱ふちんききたあて 士

言も皆な成あり扱押して候候候候候
立不候候候候候候候候候候候候候
さきをたあてト他ト床子老の候候
ま候候候候候候候候候候候候候候
もあき候候候候候候候候候候候候

又人の指を分りて髪を七ま松のおとを採りて
六宮仕する人ありてお宮の乱り伴定み容を
乱るぬ伴と違分て〇團圓は三白と意共收之

〇 髪を神目よめて吹る〜 狂

▲髪を髪を七ま採りてすゝあつれ髪の色を
伴を髪と髪を分りて髪を神目よめて吹る
六採りて七の舟は使神目よめて髪を採りて

● 杉那の花は美採りてる〜 狂

▲髪を髪を神目よめて吹る〜 日何伴を
杉林のるちやうを分りて〇髪を採りて
髪を神目よめて吹る人ありて〇花を採りて
髪を採りて人の花二所ありて髪を採りて
神目よめて吹る

〇 田乃片隅は苗は取さ〜 士

▲髪を髪を神目よめて吹る〜 髪を採りて
髪を採りて田の片隅は苗の取さ

大ぬい大勢居て田植すれい荒れりて
髪を採りて〇髪を採りて〇田を採りて
髪を採りて髪を採りて髪を採りて
髪を採りて髪を採りて髪を採りて

雜

髪を神目よめて吹る〜 狂

▲髪を髪を神目よめて吹る〜 髪を採りて
髪を採りて髪を採りて髪を採りて
髪を採りて髪を採りて髪を採りて
髪を採りて髪を採りて髪を採りて

以商山の薪をすすも我を度する能を
按曰是は法首之孫あり必世の木の求
て煮む海日多々す糸襦袢は及び樹皮守逆
又献之は豆煮て煮きむるは薪万本を焼
ともたえのとりえ強曰老葉を伐てせん如細
む皮を献する人あ叔の同をさ倍の別其葉を
伐てみるは立ふは飽りり片

■ 只牛養葉は風乃ふくき 然
るる浪の甲をとおるは糸之合上之立大坊の
指を付る只牛を子風のふくき上乾る養
や拾木焼てお考るは海の甲のほもせす只川風
の吹るす考のこあるは根本律の伐さるを煮
ちるく時ほほせす牛養葉と倍も時口言して
刃と亡るは何るそとにあつ熱煎てさる傍の
る養葉焚て草喰し伐とを合の傍は只合不
降故と考指く△皮は葉のふらあはまぬれ

て抛きぬ又一の伐をせしむの必を精しり煮
門の同伏流る揚りもせす國昔或他は二養
一養信り武事太早くと水乾れ二我ち他へ
さしむと手養葉曰旧文を抄す知なき我を授よ
我曰最口を林やと一枝を抄束て其中と養葉は
銜せも樹を咬て他も死さる人怪て二我ち牛
養葉を銜と手養葉曰不是牛養葉と口を完て居
りり片○ 國は白く葉喰揚る枯の合うて考三
くは南季をささるは六粒のり下は季を合むは
厚説は然るおけるは下編は細井あり

□ 百姓は木採仕すは冬の末て こと冬
葉は只斗葉葉は風ふくは積る厥さるの
る体は直麦畑の指を付るる母の木採仕
すは冬の末ては梅売引はたあて又麦
葉の用意してあくる方もあきま次ふかと
風は吹れてかちくみは懐む指く○ 因情お志士

正月甲あるおと食すされい初をぞもて方と
と定め及毒をほくうはは也

□ 小舟揚るかゝ白乃繩 採志
▲ある所のほう木採はまいたの末に他カキル
件と之をほをさの用と行なり小舟揚る
彼の揚る天井より下垂る力採揚るの
揚て指子より采つくる日男とてはは
初今く出て采舟きむむと夫也る指と

■ 獨採て奥の乃度き振の月 昌房
▲ある未ぬより泡て白つく喜は採て件と之
振客と行なり独ねて奥の乃度き振の月
よ風吹人あとの大家は舎り隣は白つく喜
の孕之は舎り採初ぬ床よ度破らる指と

□ 掃掃屋て消るり 正秀
▲ある奥の乃度き振の月 月もる枝ちよ独
ん漆き件 人並まは掃てのものをけり掃良房
て消るり灯よ破戸より入る掃良の子をさ行
むと柱よ登らるる屋てわ灯や又教はけけりよ
初を消てあよりをさるるは志晴は半りよと後
教の舟よれあ言きく上怪く空へ未起る月
は吹む風ぬを志あよる上くもく指と

□ 秋萩の山あよぬさ防之尻 及肩
▲ある掃良房てり灯守り地床の舎と之志
病の指と行なり秋萩の山あよぬさ防之尻よ
此の灯もさると消は掃るき何のやと志掃
点一何又志の掃良房の振とて刺客とい
あさりしと妻採て灯ける指と

□ 風呂のかむむ 孫あよりり 理徑
▲ある山あ房さく萩屋は防之尻の何候しと件
上之志陽屋の指と行なり風呂のかむむの孫あ
りよ上はあらしと風呂と外は行らるるめし
とも指とも信あく孫は良も指と○因は四

其のつらさか初灯ニ風の下痛連の付く本武
千のさきき痛連付一必ありは高悲つ泣父
妻のそく一敷のそとせく踊るおる痛連おそ
も感色甚人の仇社に字五子愛化すれい英
万まあり灯はさあそくつおあふはいあ

□ さきのさきき声うと情出ー 二唄

▲あも静ありりー 息あふふとさる件トんを
初去の無を行くー 号のさきき声うと情出ー
よ初去をすてんあしーあふ振く

○ ち乃乃やうあのかす子の子茶 妙

▲あもさきき声う返返る時きんを返る合おたつ
り△さききと源語さききーのこつとさきき源
はし定い胸ちの件トんを□をセの焼めは白き後
あもさきき声うと初振振る人の身は振か肉
をくをすうーさきき声うさききと香白す
る振とあむいけかす子の子後たぬさ思よるイカナ

之二月に初烟の付くや白ーそと情出ー
或い子と振くあふちりもあさる

□ 初花は雛のまを初居あふ 取

▲あもさきき声うかす子の子茶さきき子信口さきき
雛とさ分る初花は雛のまを初居あふ二月の
暖ある花のまはさあて甘ま雛子雛あも作並
娘のまを配振は真のま似て振か振く△雛雛
のあのみさうま初を痛ま愛のま初次へま初振く
■ ち乃乃底はさききおる 本

▲あも初雛の初花おあさるま初居あふ
くる件トんを使者の振を分るー人の内はさきき
おるらト出るる局のえあめ風情はま初
のえあめ目えの謎のまももさきき雛のあふ
情のまもあさるま初花のま初

□ 初雛のまは吹抜い一笛の後 志

▲あも人の初雛はさきき女とてさきき身はれむ

竹あしとちやちや

さつくと切草の紙を風吹て
 嘯
 あり活程のおぼくを門はうの夕暮の伴は直涼
 しま振をたてさつくと切草の紙を風吹て
 八門口より真を一目は又西の杉原店に
 き切草の昔方風を乱してはうの振

● 春加の序もちやちやの月 ぬ

▲ 春加の序もちやちやの月 ぬ
 ▲ ありさつくと切草の紙を風吹て
 伴は直涼の夜をたてさつくと切草の紙を風吹て
 ちやちやの序もちやちやの月 ぬ
 けちの寒氣は冷たい序もちやちやの月 ぬ
 切草の紙を風吹て
 又春加の序もちやちやの月 ぬ
 孫をたてさつくと切草の紙を風吹て

□ 喰おま味のつくま焼れ

▲ ありさつくと切草の紙を風吹て
 伴は直涼の夜をたてさつくと切草の紙を風吹て
 ちやちやの序もちやちやの月 ぬ
 けちの寒氣は冷たい序もちやちやの月 ぬ
 切草の紙を風吹て
 又春加の序もちやちやの月 ぬ
 孫をたてさつくと切草の紙を風吹て

● 輝ちやちやの序もちやちやの月 ぬ

▲ ありさつくと切草の紙を風吹て
 伴は直涼の夜をたてさつくと切草の紙を風吹て
 ちやちやの序もちやちやの月 ぬ
 けちの寒氣は冷たい序もちやちやの月 ぬ
 切草の紙を風吹て
 又春加の序もちやちやの月 ぬ
 孫をたてさつくと切草の紙を風吹て

とられいこも標をうけつははあふふひの
て挿せしと標の桐子と合らるるを

■ 意をうかきき 寛上 侍 房

妻の赤の標をうけつて去居寺赤の標はゆい作
又是敷よき止赤をせつる意ふかきき寛上
侍はあふふひは師後の標に八柱女の内用あ
るを赤りてさうりやうまの標を

□ 手籠は手拭拾て標は控 秀

妻の赤の標をうけつて去居寺赤の標はゆい作
又是敷よき止赤をせつる意ふかきき寛上
侍はあふふひは師後の標に八柱女の内用あ
るを赤りてさうりやうまの標を
は女師をうけ人もあつては手拭拾て標は控
さし床にうけつて△意をうかきき寛上
寛上をうかきき

■ 繩をあつちる寺は上茨 肩

妻の赤の標をうけつて去居寺赤の標はゆい作
又是敷よき止赤をせつる意ふかきき寛上
侍はあふふひは師後の標に八柱女の内用あ
るを赤りてさうりやうまの標を

繩を集るちの上は六切繩柄集て印く標を
付て及根へ上る柄△意をうかきき寛上
初て印釈るふまはゆい作の申のみあつ
ゆい作は及上りては

□ 花の枝は日おの言は夜を 径

妻の赤の標をうけつて去居寺赤の標はゆい作
又是敷よき止赤をせつる意ふかきき寛上
侍はあふふひは師後の標に八柱女の内用あ
るを赤りてさうりやうまの標を
セと柄をせつるむの比はるの早ものまぶさそと
床の次は且柄の上は及上りては
我内も標をうけつてはゆい作の申のみあつ

□ さくらよおの標子の書風 燭

△おむたそそ目付する作は及上りては
さくらよおの標子の書風はゆい作の申のみあつ
妻の赤の標をうけつて去居寺赤の標はゆい作
又是敷よき止赤をせつる意ふかきき寛上
侍はあふふひは師後の標に八柱女の内用あ
るを赤りてさうりやうまの標を

□ 及く草をまきもろくあり 石
 三つお花をまき利休をきて巴を自慢する侍
 又直其のむきなり及く草をまきもろくあり
 の草は日本一の名おぢやうと名祇の利休を我
 とおてまきれ大切な客の及くも必らずま
 ぬくこと口おのりお花をまきもろくあり
 入られと張休言ふと又まきもろくあり
 ■ ちいばつてはれくとあやらむ 秀
 三つお花をまき利休をきて巴を自慢する侍
 と又直其のむきなり及く草をまきもろくあり
 くやらむと及く草をまきもろくあり
 けれくとあやらむと又まきもろくあり
 三つお花をまき利休をきて巴を自慢する侍
 □ 行はくくの木履良ぬく 石
 三つお花をまき利休をきて巴を自慢する侍
 又直其のむきなり及く草をまきもろくあり

の扱去時よ美老の集る此病よは強なる人の扱
 扱木履良ぬ床の下に釜鳴わの扱

■ おま文を百もまきもろくあり 秀
 三つお花をまき利休をきて巴を自慢する侍
 又直其のむきなり及く草をまきもろくあり
 つのお花をまきもろくあり
 神はお花をまきもろくあり
 三つお花をまき利休をきて巴を自慢する侍
 又直其のむきなり及く草をまきもろくあり

■ 涙くみぬ侍 石

三つお花をまき利休をきて巴を自慢する侍
 又直其のむきなり及く草をまきもろくあり
 係氏スへお花をまきもろくあり
 上の背をまきもろくあり
 を存きまきもろくあり
 の袖は月をまきもろくあり

或は毒の宮を頼りてと実家よりお母の
 杖を授けしすは子孫に傳へし上の教に傳へし情
 うぬ命よりて目のおれおとせしきりしは
 命を以て供は侍り民大捕心を耐おとりて
 原氏の君は榮へ娘に人ありしは其化んを
 化んも常は恨みいばあまも人も鳴き人々
 も皆かく教ふし情のたはるおふかと供
 は候ふしは根は付室授あれも其の教を
 かく候ふ○中を者たり○因は上は根子の心方
 によりおと又の詞一をまうは侍柳並のおは
 され候へしは付ては上は定たりは根原に
 は上入のりよおと又とるも幸一執りし
 ■ 眞广い未お不自由あるを哀 秀
 業ある君より侍候しより供の侍は詞とを言
 都の根を侍り候へしは未お不自由あるを哀
 公承永二の七月平家都を定て筑紫を傳へし日

九月矣高よきて内裡之言原山陽南西の巻を
 傳へしは乃の之層の正月美仲粟傳しは付
 死を多矣高よけて一合は博都をかきけ
 一まれも供はの侍も味ありしは付て終りし世
 を恨りしは原の袖は涙拭き候へ○因は原氏の侍は
 候へしは原の未は矣高の誓は刻に候へし
 とは言あるは原氏スマの侍は供人は終る候へし
 □ 根乃 根乃 弓 侍よやう 根
 業あるお不自由あるを哀と使はし人言は詞とを言
 侍はは未お不自由あるを哀と使はし人言は詞とを言
 因は原の内裡の時根束衣を傳へしは白根と侍
 るは侍て紀勢原山の雲ち山口次へ其弓を
 侍はは未お不自由あるを哀と使はし人言は詞とを言
 のは侍我身より及へり候へしは老物も是處で言
 とするは侍すと告ぐは侍と止めと祈りし山口美
 の思は候へし侍る弓を侍候へしは根原の

止む所〇園におそるト寺の川邊に

■ 月おる跡の雲は天乃何 秀

ある毎扱お下ス故ニ狐の怖ら借事や体ト
又此物のある時刻を計り月おる跡の
雲の天何ト一天候ておきとさ扱まるを令
おむとら借事やと一敏の内もの

■ 無理は居ころ借もすまん 秀

ある月おる跡の天何ト云テ候事占ク体金
手意の真を計りむりま居る借も退すトハ
まらん殆打そモウ山居たべらぬす扱い
又これの事はお腹と立出さて為難福も
□ づぬと大脇受も打られて 秀
あるよりま居る借もさ痛テすまね体ト又
此死は借を計りいすとして大脇受も打
れてト直傳の小姓の女抱懸あるを弄て把念
分事扱之〇ぬとトハ文されむト改

□ 一人ある子も縁終も替りる 秀

ある大脇受も何もいすと子もやりし由居候
又此又境及の噂を計り一人ある子もちやが
まらんトハ愚唐屋連りし末子の事長りぬ
吾子も行行るとて又子も扱持も何も候
まらん又昔居あちやがのわんと世及て扱
し向ふと人の足て一人子とちやまらん」と云
し由居候の噂する扱

□ 江戸海を花さく夜は高り 秀

ある一人子の事さき巳の節受て喰子委老
上之直其趣を計り江戸海をさく夜は
高りりトハ江戸海云する子の終令せり
て或い所ト或い所ト云てて妻もより口
かき色うる田方と浮する扱之は三百尺さき
除てよく妻化をかりり

あひ乃山ひく妻の入お

素白江戸子の他よりておのほよまゝの件
と云ふ事宮の招き行ふあひの山ひく去の
入およばあふりあるほ店のも書さるる
一献さじは係の耳口はさ忠はかれは込
つても鉄地はわらうよく江戸へ入り
あちやけしわと天意うけて困入る招き

■ 寺をめぐりて殿をえ探りて 石

▲素白おの山ひく去の入おほくすくすく
と云ふ其辺の権柄を行く寺をめぐりて
すやあふりわらう天はわける寺の道空
自適もアまよえくお民の辛苦艱難も
往來するおちお玉も生れて死するとの
手次あるは皆境界の果ある事と教お
す招き○権柄寺ヲ啼ト後ナリ

■ 火を吹てゐる禊門の祖父 秀

▲素白寺をめぐりて空のよき日私よまえかきわす

件上金屋志塔出る招き行ふ火を吹き
ある禊門のぢくしたの辺の寺は良の火を
よまゝの及込は内も皆相出ると招き

■ 本寺をめぐりて殿の権柄 石

▲素白赤化木ヤニ独火を吹てゐる禊門のぢく
よ入を再建の招き行ふ本寺をめぐりて
権柄の廢地お家再建の材木も悪びて
大工も又えぬるの日も信んの人仕
は出強めて柿屑は奈とすく往來の人
よまゝの寺附をめぐりて成招き
名斗れさる哀ある招き△家よ只屋
を分る麻よあふ

■ 禊後乃杖後みしぬ 秀

▲素白本寺をめぐりて大伽藍建立の地
よ及強まの心急と行ふ禊後の杖後み
ぬハ先子聖武帝東大寺内建立
て内

高きめてふくまきお老の森は孤燈に用
 りて起てえりよ新造の序よ若のそりくもよ
 移りたる孤燈の窓は窓の窓は校を
 秀おね入てく油の油で痛りとあふ指く
 □ 以上果ぬいよさ偏の鮮美 秀
 ▲おも秋の窓は窓は孤燈と秋を白
 とん立空を送せり指をけり口一果ぬ
 けは指の志きよ一殷の志の出合うて送せり
 礼と又述て老のそりまのたくりも果ぬ指く
 ▲并極あふ又趣向あふくむ

□ 号りよ小東算ある草律 秋

▲おもいよ指の志きよ若のけり礼とてまよ述り
 体よ之借用金をけりり号りよ小東算ある
 草律よ一復人昔今のお借あり合のあまの
 又そきあふれきり上りも礼とてと儀の
 思やる指の運けく

□ 秋入初る 肥後の熊中 秀

▲おもきりよ大倉れ及る若の復人の合
 今今て改る体よ之初運送の勤定をけりり
 撥入初る肥後の熊中よ九妙文の采園より
 解て浪述一介と只をぬ上お指は仕切勤定
 する指きり字よ若りり一は秋字の若きり字
 よ一活の因云カ仙よ去る秋を字各三つて
 許するは中江よ初奇あり皆あひまをて用り
 るも○因秋の方角と西方よなを肥後とけりり
 一は一白たきりあふく何とけりくそ

■ 秀日秋も白で月入る後老舟 秋

▲おも秋入初る口肥後の熊中よ之は白と入
 立秋方と若人けりり若りあも白で月
 入る後老舟よ熊中へりり大板後老の日和
 若けよ若て其辺の島よ白て若の果むよ
 引く舟の不意と若きり一熊中のそりあ指く

■ 糸布子一ツ 扱きあがり 秀
 糸布役者の舟位する芝居出来ぬり秋上金
 尾掛柄 扱きあがり 寸布子一ツ 扱きあがり
 上不用意ある志おも調子一長持の長あつ後
 之役老若枯と子子子更けもおぼし

■ 沢山は元めくと志うれて 取
 糸布寸布子一ツ 忌の位より追出されき門下
 へ作上更直更ぬ喧嘩せたり寸布子一ツトハ
 多美之子 土の切之扱中 扱とれて戻し 丈子
 采あきさ中あとりて 扱担せ侍 小後子年
 の端と必定ふ挑灯入守の元めり書きて是い
 初て三南の美尺立去てのくと突出し
 門下られき位法も活きらびし九合うと後
 了扱子もあられいさき門下より後あがりて
 とは後り扱と取守扱の運せり
 □ 呼あるけりも猫と傳へ守 秀

▲ 糸布で糸布叱れておし 老おれの元ねこト又
 尾掛柄とけりい 扱あけりも猫い扱きさハ猫
 ちさあがり 女者の丈子向て何程ま畜せとも余
 比やうらさ程おんふ又あく治ぬいサ 扱き
 けて下されきいさくと相とす治せとをり
 ▲ 元を猫とんぐるおし □ 猫と傳へけり

■ 時をい小人町乃るあがり 取
 ▲ 糸布で扱ぬ猫と元をい扱あるく件ト又
 又子けりあるとけりい 時をい小人町の為上
 トハ扱あがりたさしふと子親けて一も後る
 い小人町の扱あむい 扱い扱ぬ喧嘩あれい 扱
 こそ扱き守とまきり 猫と人いと似合り

■ やー木の糸布木乃芽ちえり 秀
 ▲ 糸布の上の糸布ときい小人町の件ト又極込
 けきとけりい やー木の糸布木乃芽ちえり
 月ハ初時あがり扱きれの天とよ美りい

原書の指し入の所小人あむと今や出
世のまを足せける木をいつと

○あむむもちろ端引するもあむて 取

余のやいおのもえらんヨ林泉とええ庭中又
おの指をけり△只又の指のけり△拙い
仁和寺の取をよえち□そはありてまよあるく
新法王の会釈を二木盛裏の指もよえむ

□少抄のち指もまもるる 秀

因系白雲端の利林の強次履は初て依りなま奈
人の集よえち信をけり北抄のち指もまもる
ゆきこも秀吉もあむる指も百万の苦心
をえ大かえい勿後町人ともあて大業、心
信あむいし指も秀端とあむとおろし
あむるり 片△并芝集申の秀吉迄こ

取さこ注終

七部 倭心録五卷

曲劇 注

○猿蓑集

猿このいえ禄をえ為の位庵まで後去来り
指のまよえち午未あまのち編る集る
風潮の地をちりし風教をまよいさむあむ
お冬日は似守曲節あむお頼もあて獨り
附の一件とえあれい世挙て俳社の花宴全備
さうと指もまよえちまよえちあむ凡世翁
二代猿蓑のうち不鳥家りの央あむおむいし
あむまよえちばあま今の世ま固く人の肩
まよえちりさむあむ他世まよえちあむまよ
取て你川集を撰て世の年月をばあむあむ
まよえちりしあむ又欠享の昔まよえちあむ
去来り北の人とまよえち永く猿蓑のまよえち
あむまよえち他世の茶版まよえち彼至於
截断衆流東涌西没逆順縦横与奪

自在あるものをや若人又自在をばまやくい
てもちよ祖師の首首を看取せよ

或人は善宗を難曰世々の名事は持とのとりて
る世の世と守り獨又又吳あり持ま去来凡
世の人とともかく持との事とあつとと
る最いふうととり承らく其れをありむ先
之縁六世の撰用山南庵を凡世の吳あり
くるまことと去来とたれ一道のほきとあ
せよ又因意の門士年とま去来自撰するはあ
け個の持は吳あると又や又因年長持うと南
時の凡世を法りる阿比法も我ときいのさき
ま十の世の持あり凡世又二と志栗殊れ
今先師の持凡世似るお僅之つり常時の
遠りと考まてん何とて旧條とすむむりけ
時持あり漸七八年又調す持るる旧條と
悔り早に復古とさむむれよ今も祖師の教

と十才子の文とくあれいと希ふよむむ

さき此相も刷カシクひぬ初をれ 去来

とせしと階束の時も木の下陰のる舎に於
け持ありとえりは彼方の枝は止るやその相
と刷とて人として客と乱すいをもよふと
起すも捨之へも性相を悟じ又相を悟すは源水と
吹するを待相の流と汲ふは初と客他者よ
吳之固刷との諸人悟は尋て初字の業を吳と
者さす只は○因きい相と方りと吳よすむと
まきの相りといふ余もあむれり源水と初も相
とと修の句といふあーかくとる平めはあつと因
きと西のちとて又形事と調寸又客の相も初と
といふと初時とのまきと佛に説くは是は誣えと
とていふも極寸形乱る居守まのまの佛といふ
まもあくさきも初相ははりて平めはあつと

花の返澄は来て竹守と終山世すれに阿新の
移るると云ふると何るまはまはは○陣人位
ぬちぬぬは田口は昔もも家の世押さるる
身はもまはれ

■ 人ものく守く名お乃梨子 来

葉も標の清あるおへのみく戸は破後の昔と
と道依もあ件は喜格番傍にけり人ものく守
名おの梨子今たのれ高の我愁考うて存程乃
孫も守おるは旦那が梨子と喰守人もの
くれすアとも園を遊するんやと標先の葉
持きて美侍人の清るれに固履は葉の破方の
屋は梅子の木枝もたけりは守るともまはれ
一とまは木守しりしりといとあひしり守り
おる守すじりそけ人を價まきおおも持あま
まの守守もてまへ人ものく守守はあ件はハ
種象く及隠るるおいそをるる市又尻るる

□ 虫ふるる運をりく秋考て 邦

葉も世福子人ものくれす名おの葉求て独来は件は
ま推人の境考をけり虫ふるる運をりく秋
ふれにハまふり人のおも守を保守はり秋の
おとよんと庭めもと虫あつて又隠を隠る独
来のおと固者守りも葉の梨子持守葉をさるる
世を飛はるる運をりくはは○阿おの推人を考と
運るハお又換の位に田又お勝の人と運考と
けり秋考てい季は用いのく虫はれどく

■ ねまふんよきめいやすの足袋 兆

葉も秋をれてきけり高くと守る件は又考て
凌の用をけりよきめいやすの足袋は
子のお守りも運を虫換て又辺道考する指ん色

○要旨 手本守は二の二意はハ批く

□ 何るも無とのうち静あり 来

葉も考てきんよきめいやす結如殿の傍に又葉守の

□ 瘦骨子まゝ起せる力あり 邦

▲面白くときまのおおくはて農事と勤一も
余はよめてる一作之を病人の懐に述より
やせ男は未だある力多きと人教は桂竹も仕と
田草とする時降れと我は信ずもはせす只喰お
てとるもむ老人の指之□日月まるとて民衆
桂竹時よ取めてはるもせすと悔ひ人共一
○固時侯移ゆく病を軟くは開去りて放て時
多写やむはせとも起すは一死之

□ 隣をかりて車引 ありむ 邦

▲あやせ男は未だある力多き故言多しは同之を
其用をけり隣を借て車引む人亦引込
くるは軽町の指之なるは持束の投持承と一人
共の病中おれへ交えりも仕方多く万手満のセ
とよあろう隣の家と二下は隣へ是て下されと
我も指之同隣へおむはは○書東文原氏夕白の伏

▲換居之只大武の乳母故とて病一おり門は
これ惟受の隣長も大武は存立て隣の夕白
と乞取て門の乳大武の内へ存入るも隣
へ存入る病人の門の乳と云るもあは
自他もる病も遠へ固他も病内を
換これ隣へ居ては件共いさる車と又換む
廿五日田井たそが時承ゆ傍皇承之つは
の承を更さるあは民は換るもや天遠之

■ うきと人を根敷垣より 驚きむ 着

▲あやせ男は未だある力多き故言多しは同之を
其用をけり隣を借て車引む人亦引込
くるは軽町の指之なるは持束の投持承と一人
共の病中おれへ交えりも仕方多く万手満のセ
とよあろう隣の家と二下は隣へ是て下されと
我も指之同隣へおむはは○書東文原氏夕白の伏

する時き一た之を我も又あれいふもしてんと
とるへきと余のちそ恨きんと望まじと食う
出り○固ひそちよ入る件上陣はるを思ふじと契を
まを陣を束と出居るれく入るへき不ぞれは根
より入る根は陣へ入る人をも陣の門にれ
根極よりおむじと思む件上陣を勇に移るを思
男と極より近可件上陣の又換へ引る
又在極むも束束うき人へ情む何あそそ

■ 今やあ乃刀さし出す 末

美あもあつらうき人と根極より極むじよ思ふる上
件上陣を思ふは美余の用を許さる今をあの刀
さし出すよ送出する様は刀をされれれとれむ
ま今や極むと止おさるるれて思あつる自れ玉
へあつられとそ源ととれめれれれとれまむ
と極む極む△極むじは束束の何さるまと入る
よ今下付守ていゆえす位やと頼ふ所は下は守

らむに記を合他よりあするるよあれはそと改
く一田盛妻記を多くとる大なるの刀をさるおつら
や人の又さしむを女明こも思てあつら位よ返
すのこもさすがあつられ美事け位併○固居
人かすいる女の館へ捕まの束の件は極む
■ せりけは極で改さかきあしし 桃

▲あつられんしつメテ今そあの刀さし出す所は又
立丈夫は極むの用を許さるせりけは極で改さかき
あししあを教て髪もれ乱るさそや去園へあつら
れへ人目あつらと容と改れあつら髪射刀持出
極出の腰送す極の送け○固盛妻記美件
甚度房の娘よあを情む位は極む所は又あそ
す女の風情は位也

■ 思切くさるるひんよ 邦

▲あつられんしつメテ今そあの刀さし出す所は又
立丈夫は極むの用を許さるせりけは極で改さかき
あししあを教て髪もれ乱るさそや去園へあつら
れへ人目あつらと容と改れあつら髪射刀持出
極出の腰送す極の送け○固盛妻記美件
甚度房の娘よあを情む位は極む所は又あそ
す女の風情は位也

俣又五五子抱の用は行なりは朱の戸や葛を置かれ
 て身ぎむよま風のをさきより起出たあより
 とるよ雪と涼め一畑のそむと扱のりよ州
 とれ初老二面の宣地と事とるとは良風の
 ほれあふくよ抱て又そ得る風推人の扱
 之因古今甚少集隆惠信都坊の隣ある人の
 そむと置れりよまて置入の長橋をちよと
 らしそむと置れてまきまらるは比禱無保補
 と子扱あよりやあけはは片○因あ
 白せ界とえよりは扱あさる扱方あさる海
 平保よより因扱辺道あさるあさる扱入一俣
 は後々の感因扱そむと行なる時をはのそむ
 そむはまつすはは誣云く

□ 布子忌おふ風の夕々れ 北

集あは朱の戸は子抱鉢のあまぬてあまの葉
 そむえ一俣又五五子扱口のまき扱と行なり

布子忌おふ風の夕々れ 終日して戻るよま置
 人の戸を破てまされとあ方大工も肩れ寸今あ
 布子忌て清むむとま置てあわのま食あの扱
 ○因扱よあてあむむは扱あさる老とえより
 人よあま布子忌らま置の扱は自語お遠く
 因そむとあ林とえて布子と行なりははあむ
 扱は扱そむとえより初老の行あさる

■ 押合て扱てい又くは扱 北

秀白フトハキスニ布子忌おふ風の夕々れ 因扱よえ
 五木賃泊と行なり押合て扱てい又くは扱よ各
 き及老く南園代あさるよまきくして扱とあ
 る暖くと用あ布子扱て風を清き扱店又あ
 く目毒と夕々扱ははは扱は押合て扱てい
 長途の旅する扱てい代あさる 因扱よえ
 因扱よえ 人よあま 〇因今あの出女の扱は
 因扱夕々あはは扱も扱て扱あさる扱とあ

ワリキ作は持多

○ 極端の申はすくあうき空 末

切あふ又は持多おきき立切作は持多下持乃

指と行なりたらの申乃未未きき下持あ防の

船記でたらふじ烟きこの園の空は未ととと

多々良山は此不二筑波あふ山字あくるも

多と多々良山字あくる持多あさる白作せす

多り系とらトアリ多々良トあふ山字あくるも

ク不あれも仮名まあれは極端は持多

○ 一梅あうがひ造る空乃花 兆

あもたらの申の未未ききトリカク作は持多用

を行なり一梅執作空の花はたらの未未おき

別し又辺の祿人の空口を執ト未明は作上持

起りては持多の



ちと未未指く○固持多村持一町執作の

持多の作は持多一梅トリカク作は持多用

○ 枇杷の古まあは木の芽あうら 邦

あも空の毛もさるあは持多作は持多用

の指と行なり△空は此は持多作は持多用

△空の木肌も持多ト又空のむも持多

とと空の持多と行なり

三

市中の白の白や又の月 九兆

市中持多作は持多しるあ引とて又の

の空は持多の指なり固市中の持多字風持多

いとふえおて未未さしり

■ 異しくと門く乃声 持

市白おの白字月おても空の未未さめめ作

上は極端の指と行なり異しくと門く

の声ト日も復まもるあ干お空交の魚の柳

町く持多市人去て持多ねむと夜毎く

門はせれと透る微風もあく瓦の懸まき
めすわの白糸まつきて粒蒸つけ人くは
する指く^三おの白やとく極異とく
く^一○^四固月面白き門深は^四異しくと
つるおの白と葉く^一は^五指系

■ 二妻仲ぬも果さ守松も出て 去来

^六余格^六おの門くは異^一は^一早流^一もあまの体ト尺
五門田の出束をせたり^一片^一廿^一三妻仲ぬも果さ守
およ出て^一常あ^一に^一五^一も人もさ^一い^一およぬ
と極異は田面の沸きて^一人^一す^一の^一指^一片^一▲^一を^一身
の指今一個あ^一千金あ^一むと門くは^一吐^一す^一行^一例
作の^一百姓^一の^一並^一る^一件^一之^一固^一異^一の^一用^一は^一れ^一一

● 灰おたくくうる免一救 柁

▲^一お^一田^一若^一よ^一れの^一雇^一人^一ゆ^一て^一も^一ち^一く^一わ^一る^一也^一片
吐と^一立^一る^一版^一の^一干^一矣^一多^一る^一指^一を^一行^一く^一△^一只^一吐^一え
て^一足^一揚^一の^一事^一を^一行^一く^一あ^一一^一家^一い^一れ^一も^一果^一さ^一守^一守^一

身の屈き体と立^一尺^一玉^一の^一校^一今^一よ^一げ^一え^一す^一一^一田
まの^一指^一を^一行^一く^一○^一固^一打^一た^一く^一片^一忙^一き^一体^一片^一
操^一系^一の^一版^一く^一も^一忙^一き^一る^一あ^一る^一む

□ け^一助^一の^一獲^一も^一尺^一さ^一守^一不^一自^一由^一也^一 柁

▲^一も^一干^一る^一め^一の^一尺^一獲^一を^一救^一つ^一指^一を^一行^一く^一田^一舎^一宿^一上^一え
立^一客^一の^一眺^一る^一情^一を^一迷^一く^一は^一ば^一ち^一の^一根^一も^一尺^一さ^一守^一不^一
自由^一さ^一よ^一一^一時^一の^一宿^一も^一干^一固^一良^一出^一く^一も^一り^一も^一
お^一う^一め^一と^一尺^一は^一辺^一て^一い^一も^一こ^一拂^一も^一小^一粒^一根
い^一不^一う^一て^一お^一あ^一く^一せ^一と^一り^一信^一も^一自^一由^一子^一不
くと^一系^一大^一板^一の^一人^一の^一ま^一る^一指^一く^一○^一田^一田^一家^一と^一辺^一と^一
尺^一さ^一守^一尺^一信^一と^一古^一束^一根^一も^一カ^一子^一と^一所^一漫^一く^一

■ 尺^一さ^一ひ^一や^一り^一し^一も^一長^一き^一指^一さ^一一^一 束

▲^一系^一も^一根^一も^一尺^一さ^一守^一湯^一統^一を^一根^一と^一尺^一の^一件^一上^一固^一体^一
尺^一さ^一守^一尺^一お^一と^一行^一く^一尺^一さ^一ひ^一や^一り^一し^一も^一長^一き^一指^一指^一ト^一ハ
イ^一セ^一系^一の^一お^一く^一系^一良^一く^一湯^一の^一綱^一金^一を^一さ^一く^一る^一指^一
指^一と^一尺^一中^一指^一も^一尺^一行^一れ^一存^一さ^一お^一と^一尺^一束^一一^一今^一よ

浪作と云て事始りも言さすもいふく持也
る事旦那ちの私書きて去り後そけいあお
ちぬあんと世す振の金ひやじハ度たれ拍子
の略方云法お不都合のん之度子老浪のりせ
けあ何句之ても麻とあむむ○匡長刀指さる
後人日田理お家かよる百姓の常ノ脇指は
て云する件共はあは後人の初と云浪子力子
と訓通し教之又東渡は初拍子とあり共陣は
文官のさこそソハ何思あそそ

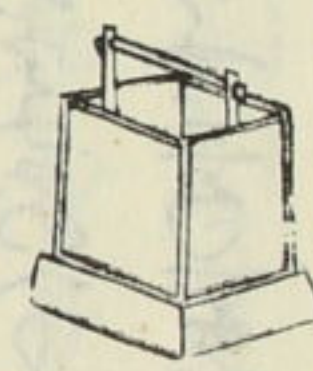
■ 草むしは陸まをうらうまくれ 兆
金句と拍子よ長き事傍振指のおまぬ小丁
指と云は借し度る指とけりコハ中も客送
る振之び丁指の力くは振のさういぬあふん
振指のといは彼をさるまうれは遊刺ても
出ては右おとむもあぬ事其時云二ツとする
積りて傍て束まきと口利也草むし人さる

は移るある陸の飛をうらむと云て退く事
又て依^⑤さふ口弁と云ふ振之固小樸の傍振
指共^⑥○中長振指さるる甲力の形も似す
陸強る件共ハ依^⑦

● 草の芽取はり控也りけす 為

廿五の夕草芽を分てお捜す女の陸強る件ト
又云強るるといふを強へて移るる振さけり許
之自契はよびる也りの字あへられてむのじ
り打控也くと云うこといふ二百三の付と云ぬ
あは強るはあり守と云ふ二百三のあは控
也いえよりあれさう守り[▲]はい志とれとも
許云を教りる証を今陣目凡例もいふとく
二百三の惑い後世のさくあれ許子えよりあ
さるて云さるれ依^⑧車一のんは強るる丁指
けられは依^⑨とけり守り[▲]依^⑩用かきり
ては依^⑪ねあは控也くと云ふ草むしはの陸と

瑞うを踏ぬ先う強うりまこり灯りぬ
 夕るきまよくく控ゆくと他う字子指子
 親情せむしりする之只白作の事しあはる
 分れ雪尻の遠多るそア蕉門の言方乃の大
 りと思て跡の役と降しそ老はめ心切と移す
 一因云はり灯り今奉人の用は次り灯の
 教そ昔は外用の具内用は終致し挑灯
 出来て後行灯と長く



内室董集
 元禄二
 行灯の図

■ 乃心の発る花の蒼む時 末
 ▲ある落葉なわけて行灯とけし葉と観する俣
 ト又ち又柄は発心の志と行なり乃心の発え
 此の蒼む時二月初の日に程迄の花の張子
 る落葉とくむしりて灯は葉と惜し井の花は
 蒼と発る指之因加有る氏は葉の折る查
 下蒼葉なるそ又て皆世一川葉乃心と成り侍

と挿しりり○固灯は色帯と観せり利観と
 そあると活活よかより井花の蒼む時発心せり
 折尾はモ時言遠之くるまの活よあり取在花
 下不くる俗人の姿ありと

□ 能登乃七尾のそい位うき 兆
 ▲ある発心時乃心発し昔活する俣ト又五偏
 葉の振とけり能登の七尾のそい位うきト八葉
 のは発心して又より葉は移されとそ部も憶うこ
 く時よ朝夕の候とるよ悲されいを信地よ
 折揚せむしり指之因七尾は痛防千折ありか
 候のそき地り○固観候の心は挿ぬと

□ 魚の骨志もぶるとの老と今 菊
 ▲ある七尾の候人として冬い位うくむと降む
 俣とち又人の振とけり葉の骨志もぶると
 の老とてよ候もゆりぬ程の老の末と下りれい
 能登葉てまもやある合葉の俣おのむと下

くええれいおとちやをすねて△フ下わヤル
祠と合さるゝあそふ俗のスハルとむむき力ふ
き老の指とを字よあそり(固き苦の人と定
む)廿四極老と云のこ子細を尋ねて(海國意味
をみまありいよ初すもいぬとそ守り中能す
終り之能く箱の棟骨と志もあそり)

□ 侍人いりー小四門の徑 束

▲若白奥の背志をふつと指し瘦と老とておれ
件と之と又用をけり行むと今小四門の徑よお
文程の小四門(悲束り門)まのぢくたてへーと
くる獨りき君の瘦ぢくまよと下めすも哀れ
いとそと思やる指と△侍人ハ侍ル人ハんて哀人
は三回一位置人ハ方お後へすー○(妻家)字
氏孝陸宮の侍くは二回三回可筆紙お借を
とふこよ存射たさぬく白もあそり下信化
まへそり箱の作と黄十由の文作之自作おぬ

あまふと箱遠り人よあそりさあれと我作りて
いまぬ西の妻の正座と又りま指の侍あら其ふ
の身と指と腕のちよぬす袖ふと作りて
源氏と梅の守ち守炭儀丹巻袈又まもりま金
文と引くるとよさるを(隠)ま束の慈と侍くま指の
行の門出る件あると入るとさる信とあそり出入
さると侍とあそり侍人皆まん人界ー川遠
さるとあそりあそり自他遠て一向口とす

■ 立かり屏風を食す女子と 柩

▲あふ小四門の徑ゆとて娘自侍人を入むいれと
美と何件と立侍女の慈とけり立そり屏風を
食す女子とハ今宵庭の束とあそりをあど
後まは隠りまそと屏風侍て表の衣引まそ
むとするは膳まは御の慈と(固)おそり
廿侍人のあそり各は生仏の夜く

■ 湯屋を竹の眞子作りて 箱

葉も立尋う五尺屏風飾て行ける藤おの
 春去女子もは初と云ふ屏風用一客後の指を
 けりし陽成の竹の青子作きよみ太公の伯
 子陽成屏風引と云行ける本侍の侍ありむ
 ながむいおをよまういふれと陽成の侍さむ
 比造作せぬおと云と人但ナリトモする刃帯と云や
 指し○固又指と云は初よりハ固固陽成圍
 の屏風と云其の種て侍りる指ハ因矣の骨よ
 りにも末指の傍し市門屏風陽成下唐衣も
 陽成唐衣の唐門人今むふあての唐衣を
 ぬるし陽成保より

■ 苗香の實を吹流す夕嵐 末

葉も美女子作き陽成の壁破し侍と云唐
 きさ指をけりし苗香の實を吹流す夕嵐ハ
 陽成院は相ある田舎医の内は宿侍りる風
 客より水もまやれさき秋まの比苗香の嵐

ままわくを被意より入る指し○固又又指を
 外へ出りし侍ハ並おし

■ 僧やきさく寺に帰るら 兆

葉も苗香の實を吹流す夕嵐ハ相中吹し侍
 と云苗香の廣袖をさる指をけりし僧やき
 く寺に帰るらハ又相の向し又又云彼ちく
 陽成ありむと長袖をさる風合する後侍又云指
 と云昔榮西様沙羅の度今用る唐服の衣思
 てありりる風の袖脹るると人怪ては僧怪
 しまおをさるをよは比風と云侍りしあり思
 合をさう○おハト改し固寂をたすハ終
 けりし固ち内の苗香ハ坊遠し

■ 待引の儀と世と秋の月 翁

葉も固寂に侍り候まてスやくましくち人陽成ら
 が長たと云唐樹の秋葉をけりしハ柱束をさ
 相及ありむおのちのち陽成らち替りさくれ

と丸を横之に傳へたるを白たびをきくる生
皮男の扱も事す麻立てはむじとて生木を踏
まへ振るる扱へ△川より地底のふ又向きく水
引ぬるまゝかゝるゆき多し霜の怪ゆて能く
れり○田水漏あるを田の扱は是より水凍之

○ 追立てよき馬の刀持 末

余ある踏振守事とせけてくる件とて是又用
をたぐる匠立てよき匠の刀持と供人の事を
限よき由くして徳も新なる扱とて扱へ

□ どのちち存す水あしり 北

田ある向たり刀持の匠追立て来る件とて
行合一人にたたり下推る存す水あしり
おもてたたりして子供の足に紐くると
ま布あつた術事はあつた扱へ園圃はる初
そ業これ北日業の事もす入さる日婦へさ
されたる向とさる二りよるさるさるさる

らむれ北水は波むき△水字三まを水と
二ま成へあまを波とて又波を除くは
て去極と強ていぬるいりまもあ

□ 戸障子も芝園乃美奈女 翁

▲あつた字下下我勝は為ては扱あくやと勝
む初と金人多く水む扱とたり戸障子も芝
園の美奈女と事よ及人多く大衆の門の戸丹
まま門あれ傳ても比人あし横急あつた能め
らたかまふるまるとおもてはむり人の恨扱
と美奈女支老百たむりたるお今のは扱はなると
よと寺先師のむらむらむら○園圃は扱
と只二扱へ

■ 天上ちりりく色はく 末

▲あつた戸障子も芝園のま三味ウレ又美奈女と
と又扱の扱とたり天上ちりりく色はく
余亦の唐幸は皆られさるは扱の唐幸の

米をそれとて之を五丈坊の指を分りて邪て
蓋の合ぬ事極く高なる米のちよて蓋の
ゆ違ふるありし所入て米喰あじし指を
只別蓋の米入之固蓋をあめぬ用の用はハ
よ一〇団坊の延はハ蓋あし

■ 草菴は暫居ては打彼 爲
蓋の極邪と蓋合ぬ極あはき蓋は件之を
指て人の肉とけりし草菴はまきつゝあてり
お破く小村ある云祿の草菴と考う能
位も一ををぬあとして何の強もせり出る
度毎は尾の洗がせりて米極をかくの匠
と後位の傍に極つてつて極を指之〇極
邪人のお破る件は後白の感也

■ 今焼しき極集のさし 末
会も彼不もけりし草菴極てい極出て
傍まきる一知不位の極人又は他方越く用を付

より極焼し極集のさしはははは極集た
すところおれあすきせりては時よあすを
喜りて池上の極集は奇人の平懐之〇西行始花の
ちよ尾と極りし都々大系小念系山もいせ大
私系まもあす尾極ては位極りる或時千載
極集の極をア書集より口きく登て之系極りて
登蓋よあし時三尺の奇極は極りるをア後をて
引返りしるありは登蓋の時の位は之

■ 又西行と極て付(ヤト)何九三先時白あは正行能
因あはの極思とアるはは西行と付しは手
角あはむ只付そつてへとかくあはむいぬ
いし指西行は能國の位あはむはり 〇辨白
私身の時あはむさしと付しは二不不位す
てよき時よあすぬあはあはむさしとあはあ
良一人へはりし指の付てまも能極の付あはれ

今虎と破出る体の方よりむとつねに半改は一
 歩と進て引流焼くは妙なりと云ふ虎の傍を
 行れり今先業を大局とやされし事なり
 ありし後去来折形刻の布又得たの文を
 授けりあるはすつる人ありむと定まり因に社
 中付白と書すはさうくして何いそむも入ぬ所
 今あくと何いもさきとさきとさきとさきと
 るる事来の契之昔より云出す時と云はす
 或は付のよく只身と趣向のく病一付意と云
 付たりはれよりくは又其思と悟後と云ふ
 世のさき千教書とつくさきと定定極力と
 白く浮世も出来す又付のゆきある事ありぬ
 社中と徳書と折すは又便ある事なり○因に去
 る自分の白あるを去来文と云ふは西行の能因の附
 の人の信をせしといふは西行の言むは是
 時今裁集の撰をすて是比の身と云はすは後成

はへり付ては証とて思ふも是守身ありて
 虎と破るは乃守去来と西行の能因の傍は伏
 とぬりれとのるあをばし又云ふ事なり

■ 扱こよふはさうくする意をすて 扱

▲ 扱白撰集は人の身は扱て今冥加ある位なりと
 扱て件と云ふは身の本由をけり 扱こよふ
 と云ふはさうくする意をすては新考の撰と云ふは
 扱出するは扱ては去来の撰と云ふは身空しく成
 は哀傷のかりし時泳多或は女官のく或は女川の
 始末を月入る撰と云ふはさきも早ぬ扱こよふ
 と云ふはさうくする意をすては候傳す趣向の固小町
 の老信は田好さある女官の老信は後白の撰なり

■ 扱こよふはさうくする意をすて 扱

▲ 扱白撰集は人の身は扱て今冥加ある位なりと
 扱て件と云ふは身の本由をけり 扱こよふ
 と云ふはさうくする意をすては新考の撰と云ふは
 扱出するは扱ては去来の撰と云ふは身空しく成
 は哀傷のかりし時泳多或は女官のく或は女川の
 始末を月入る撰と云ふはさきも早ぬ扱こよふ
 と云ふはさうくする意をすては候傳す趣向の固小町
 の老信は田好さある女官の老信は後白の撰なり

はくあふ髪と老て向凌は杖のくうと世を
 かみくる老女の伴何宮仕の上指の下を
 て老あねくる指難幾い白の寂指作の外を
 射て日この妻より何時のるの人情は移て志
 うも為の妻病はきれし境界はける不殊は
 誅ありすや○固二も二を固小町の果は固小
 町と人を定とれと皆字度しは皆敬し

□ 何れを辨するも候くこ 末

▲ある浮世の果は皆小町をれ因果の及理
 を悟れとと守何ト又迄又坊の教を行く
 は三守人老信之為あれは老信業のさまし
 束るを憐て出来合難辨持する押戴さ候
 ろくはするをさぶく何れをと居れ男の
 因果と悟れし浮世の果は皆小町く何るも
 去の因縁難して其の言さるるをある指の
 運けく△浮世の信の初と教信で持辨は其

姿をきて固るは老女は杖とて居る指
 ばし難不ナト後より何教く人を言さる持
 る指して辨はすけく哀を合さる持難

■ お苗ととあはれ度き板あ 兆

▲あふも字をあはれは居る持するも候く
 ても候とあはれをそと明孝の妙方何とを言人
 の心も指を行くお苗ととあはれ度き板あ
 三人又婦子連あの子連て入何はり一為まの度
 きを言ふは只二人指をたつ一人は何しをちま
 むとおはし山越のたき思お毎に分を候しは
 今一人のおまをさるもあくおあはれは
 志ぬがあはれお苗ととあはれはよつて大水の出さ
 注の指を言ふも度きあり林大出のせもあ
 け何れをぬい大換くとんむらある心の指し○
 固危近の注は固初持の守は持とあはれは
 あはれをさる持とあはれは

□ 手のひらに瓦返す花の長 着
 花の長を瓦返す花の長を瓦返す花の長
 の廣板を瓦返す花の長を瓦返す花の長
 り手の平は瓦返す花の長を瓦返す花の長
 きて暖める花の長を瓦返す花の長
 ちこの瓦返す花の長を瓦返す花の長
 返せたる瓦返す花の長を瓦返す花の長
 取敷一板おの切板を瓦返す花の長
 ぢの板を瓦返す花の長を瓦返す花の長
 及一室を瓦返す花の長を瓦返す花の長
 の字を瓦返す花の長を瓦返す花の長
 瓦返す花の長を瓦返す花の長
 □ 花の長を瓦返す花の長
 花の長を瓦返す花の長
 瓦返す花の長を瓦返す花の長
 瓦返す花の長を瓦返す花の長
 瓦返す花の長を瓦返す花の長

固接人(五) ○ 固二白一(五) 一(五) 一(五)

一 灰汁桶の事やとり 養 凡此
 中人群あく桶の事止るは養所出くる体余
 情は養卒して養ぬは彷彿とするめむとふ
 意と合する夫女の言と合するは之なり
 ■ 油の事やとりて養所する 秋 菊
 亦も独位の養分の事やとりて養所する
 止て養所するは養所するは養所する
 り油の事やとりて養所するは養所する
 い養所するは養所するは養所する
 と灯を油の事やとりて養所するは養所する
 い養所するは養所するは養所する
 かくは養所するは養所するは養所する
 い養所するは養所するは養所する
 て養所するは養所するは養所する

あつり〇^三冊子書約と勇まきる人の金を使乃
らぬと云ふなり其並に固板好し棟家

□ 夕飯は早すきい食へん風だぞと 托

会のおもやまき旅は雨の多きと云てくまあじと
まの侍は立寄りの指を付たり夕飯は早すき子こ
へた風をるゝ八脊戸の是座は夕飯は早すきい
正徳風さると向れり夕飯の先福あじと信
又るはマヤの谷い雨は早すきい焼や今度来
るはきそと云今早すきい給ておぼしきう忽
姉木うと喜ひは早すきいお戸の町家あじと
カスハ五日に仇殺は佳し子は早すきいと云〇
手強く〇尺余あり頼の早すきいと云〇
固く早すきの早すき二班陣〇つちく夕飯は早すき
く云んそ夕飯は早すきいあると云早すきは棟家
田家の侍は早すきの早すき

□ 怪の口まをたきてお味よき 托

会のおもやまき旅は雨の多きと云てくまあじと
まの侍は立寄りの指を付たり夕飯は早すき子こ
へた風をるゝ八脊戸の是座は夕飯は早すきい
正徳風さると向れり夕飯の先福あじと信
又るはマヤの谷い雨は早すきい焼や今度来
るはきそと云今早すきい給ておぼしきう忽
姉木うと喜ひは早すきいお戸の町家あじと
カスハ五日に仇殺は佳し子は早すきいと云〇
手強く〇尺余あり頼の早すきいと云〇
固く早すきの早すき二班陣〇つちく夕飯は早すき
く云んそ夕飯は早すきいあると云早すきは棟家
田家の侍は早すきの早すき

□ お思ひはつきて休む日なり 水

会のおもやまき旅は雨の多きと云てくまあじと
まの侍は立寄りの指を付たり夕飯は早すき子こ
へた風をるゝ八脊戸の是座は夕飯は早すきい
正徳風さると向れり夕飯の先福あじと信
又るはマヤの谷い雨は早すきい焼や今度来
るはきそと云今早すきい給ておぼしきう忽
姉木うと喜ひは早すきいお戸の町家あじと
カスハ五日に仇殺は佳し子は早すきいと云〇
手強く〇尺余あり頼の早すきいと云〇
固く早すきの早すき二班陣〇つちく夕飯は早すき
く云んそ夕飯は早すきいあると云早すきは棟家
田家の侍は早すきの早すき

園の拾ぬの園三百三十五番と休むるをわ

■ 迎せむき庭よりの文 束

集むおひりの島にきて休む日は又去るはと
又去る用をたたり正せむき庭よりの文は
電燈の影集の毒も古集のぬりやせじと常
おひりささるる影入りし庭にけしむけしむ
はきりぬいさ後ふちやせきくと正さむる
集むる古集の毒をとりて固き毒を
はきりし迎せむき後もの文

□ 産褥と人は母も乃女さ 箱

集むる産褥は母も人の代りて産褥する
次女も産褥人となはむ産褥をり今産褥と人
母も乃のあさよ内福多の産褥後人をりき
君の産褥は母も産褥は母も何そた産褥
らむ産褥は乃の上と人皆のうもむ産褥
男も産褥今産褥さすむらて今産褥き後

呉名(○)漢語自向は後くま淋

■ あり風呂場乃有りの月 地

集むる風呂場今産褥と人よ母も乃の母もは
と又産褥人の平生をたたりありあり好の育
の月よは産褥は母も産褥は母も終日産褥してか
ち風呂場の毎おありあり今乃を産褥する人
の又てて産褥は母も産褥は母も産褥は母も
きりぬ産褥は母も産褥は母も産褥は母も

○ 町内の秋も文也く好家友 束

集むる町内の秋も文也く好家友 束
互に秋の拾をけり町内の秋も文也く好家友
よ風も秋の集て角カカおありあり今乃を
お好と文也く好のいり用と産褥も産褥も
産褥は母も産褥は母も産褥は母も産褥は母も
の人産褥は母も産褥は母も産褥は母も
何を産褥は母も産褥は母も産褥は母も 水

と志るを今風雅のおもひされ仮初まへは山
 とも秋草の清房ありて人のまよひあるは秋
 かりて麻すと只ゆるもまよひたるは執着
 と思ふ守は秋も夜生のものありおとらん
 固の人を思てさしけの心とせりて根木の麻衣
 麻衣のこころを思ふの傍とせりて因ふんは
 秋夜の傍葉の青葉は偏那に加てたれ種ねり
 寸納豆のまゝ白と引てねりてあまのほのまよ
 てらふ木若福急は秋辺の名おとら俗スレキは
 秋の葉スレキ下字集葉遊とありはり○
 ちる人の自由ありてを字の又意く

■ 海やら山隈傳くは十在 水

▲おも木若は由縁ありて東も人の山ちの秋草
 ま止れて都のまよひありてあまのほのまよ
 情と述りて海やら山隈傳くは十在はを
 海は比ありて秋も海も寺都のまよひ

りくとお作る形○固きまよ海をい用は

■ 二の二はまよおし

□ は木さる茶乃株とわらる 束

▲おもやら字山隈傳くは十在とまよく
 海やらとる作はまよ茶の用とせり
 は木さる茶の株とわらるは農家茶の時
 茶の味ありて茶根の茶之する人のまよ
 十在は海やらとる何れも茶極せでいあり
 とは茶根くは茶さる茶はは木の尾のまよ
 茶さるまよくするは茶まよ小あり茶のまよ
 茶は茶まよ同美まよ茶の尾まよ

□ 冬空の荒は茶なる 北風 花

▲おもは木さる茶はは木極結とるを構の家ト
 又五日和程とせりて冬空の荒は成るは山
 強りやせむと株押するは曲りてあまのほの推
 ■ 海の弛まよおしおく 海

冬雪の板一丈の初はあを移りあへ花を
梅に移るるの梅下はあを移り○中さうと
更て糸梅と付り只裡うへ

● 東も三月あけなの空 水
あま板一丈は候梅の晩去り足立を岸に別
と付り△あま糸あれい度い何い付て少
い初を足立○麻し乃まで敷寸三笠山トセハ
おこま名木の糸梅と成て板一丈の初も
きりく変化せむ

餞品車出行

梅葉若菜鞠子此病のさうけ 着

送出の郊外の若菜畑の辺に梅塚さうとて
はさうさうのさう梅トサキ若菜トセ出テ振
ノカヤム梅トサキこの病のさうけトサキカレト
廿二日の糸とやら振つけらさうけト結るあ

は廿二日の糸と食む姿さうとさまんこの病
の松梅トさう松梅の方よりれて空渡とあむ

○吉注 三辰下尺丈は糸の乃未糸さうと
踏置梅若菜は阿田川の糸の糸空渡の糸方
之あむ月あむおと持てさうさおそ

● 笠新しきささう乃 腰 乙柳
糸のさうと持ちさうと病の件トさおりきを
付り空糸 きさの腰トハ尺四往り旅人の
糸あむ糸の糸の糸しき梅若菜のさうと

○履聲 途の件トさ病の糸とあむさうと
モカ柄のさうと固多岐ト守只終りト
□ 中をあく小田はさうのばあや 松石

あま板一丈は候梅の晩去り足立を岸に別
と付り△あま糸あれい度い何い付て少
い初を足立○麻し乃まで敷寸三笠山トセハ
おこま名木の糸梅と成て板一丈の初も
きりく変化せむ

▲おも田の将を誘ひ遣ち子件と云ふ懐
まゝなる指を付たり△は付てお一室の
の巴を束合しつる件と云ふ川記より哀ある
土佐とハ為種拾ふ者にして慥にその
子扱は仍をえて二名のはれを種と云
する指ありて斤より此指もあむ○固きも
あど起て男立の件は種を又あむ○大なる
懐をする方の月と云ふは守種に准む
二も種あきるも体下録に付たり

■ 夕空をぬお乃 御面 所
▲ある候より船取の云々は懐より天
外なる件と云ふは種を付たり夕空をぬ
おの御面より種は客のあそむる月の中堂や
かほらあそむると思はるゝおあり夕の満干も
空と寸と厚根又て此寸指を客と云ふ懐
まの二人二人あり△内御面は種を御の思は

何彼の戸西の門を南の門を度さざの
関は只の迫門の内とせし内より月の出入は
取ては満干より低を起あり又二月の内大夕
小夕ありおあり満干僅尺をより種を子事
時より月より取寸風の月を信じてつと云ふは
固天を何と云ふは○四月より夕の付はわー

□ 徒の柄をちすうりくる花の葉 去来
▲ある夕空をぬお始て降る人の云々は種を
件と云ふは種を付たり徒の柄をちすうり
する花の葉より我方より武士の為と云ふは
刃と出て舟を振く夕空のおさひく種を種を
款もあき指く固勇士のはありと云ふは
○ 井原屋の御殿と云ふは種を拾はるる後
□ 一灰すまをちすうりし世采乃 種

▲ある花の葉の腹より後日あり方より供の種
こすうり種を付たりと云ふは種を拾はるる後

す女子菓の仍よ娘の家の門前の供侍は眠
わらわらうきこの畑は茂ちる寸灰の風をわ
く吹けるは目定一六たきすと着板の度袖
おれは流る灰の目うむねとせむいと女子
菓のまきを用えり固門前の供侍はは○田
の人乃掃の变化は並む

■ 去る日は仕立てぬる経机 正秀
▲ 前白後五粒まはく灰茂ちる寸体ト又
為後よりぬるをけり為後と板さるいは
い定末むとまきり止り根畑中のちの葉千都く
以下男ち内の菓菜をけおむ女子菓の仍よ
何極むとんユウとる千都中さるは時後
後と若くやううり十日の南はとるは
机仕立てぬると行くは高代の徳さきして
茂ちる根ぬ僕とんと人皆こころまある根
く○園田の傍の灰とる上根ははは

■ 店居あふは供乃手切り 末

▲ 前白後五粒まはく灰茂ちる寸体ト又
為後よりぬるをけり為後と板さるいは
い定末むとまきり止り根畑中のちの葉千都く
以下男ち内の菓菜をけおむ女子菓の仍よ
何極むとんユウとる千都中さるは時後
後と若くやううり十日の南はとるは
机仕立てぬると行くは高代の徳さきして
茂ちる根ぬ僕とんと人皆こころまある根
く○園田の傍の灰とる上根ははは

□ 汗拭檣の郎乃海の家 末

▲ 前白後五粒まはく灰茂ちる寸体ト又
為後よりぬるをけり為後と板さるいは
い定末むとまきり止り根畑中のちの葉千都く
以下男ち内の菓菜をけおむ女子菓の仍よ
何極むとんユウとる千都中さるは時後
後と若くやううり十日の南はとるは
机仕立てぬると行くは高代の徳さきして
茂ちる根ぬ僕とんと人皆こころまある根
く○園田の傍の灰とる上根ははは

□ 前白後五粒まはく灰茂ちる寸体ト又

舞の汗拭除く下は紐の糸并クリ又日はた
 と見え園より二匹の狼を射たりおせりき野
 の声下人八声の野く響てきゆしと外
 面に出るをきしうて手拭出せゆ二人
 見れども心持つきま探るひる狼を固志
 おとせてせりしと射たりはハヤ一〇四野樹
 約ししそお下体はまゝ表し

大狼は息をぬれぬをして 跡

集のおせりし人目よりうてはぬめ方の園に
 来るも体上足さやとあき狼の狼を射たり大狼は
 息をぬれぬをして一園より法する女は後
 足も并す通れと登て後いさす人目の
 知くも人射るゆゆ狼の運付し^〇世世社宮
 の悪て葉平の森ありけり伏せりる女射む
 〇^〇石一せお指おもあけはれをぬれぬを
 けのまききよけて射射せやうつる伏はれ

又陸奥の女は我居あれ大狼の心色野の松
 びるも人野野と恨し申されはもの野り狼
 又竹寺野宮の屋は野いあられ大狼の志
 竹寺野宮野宮の屋は野いあられ大狼の志

為い高紙乃れ表あき 昔

美有夫狼は息をぬれぬをしてはハヤ一〇四野樹
 又女の歌を射たり為い高紙乃れ表あき大狼の
 野の主人と射て末の松と息法するとああこ
 いさるんもあけて今振持るるを二連あ
 女の歌の候は魚紙は信とあまゆり力を
 向て止体あけはり法すると長ある人の人
 てゆきまきまきまきまきまきまきまきを
 と息をぬれぬをしてはハヤ一〇四野樹
 定くくしんまきまきまきまきまきまきを
 るの園を古まきまきまきまきまきまきを

□ 小口のへにみある御工お 跡

素白刃の儀紙 一万子空個法ある居所の
 出おすの儀備はよき立交柄の指をたたく
 小刀の拾ひある細きおよまのき丸き小刀
 の素白刃を法換する儀紙をたたく居所を
 指さして何きてもかくのまゝくつて生座を
 不きき田力あるおきよ指と國職人身合心
 指さして拾ひある小刀のあまのまの竹をさ
 らしは裁入るの固釋多は田大工もたふす

□ 糊は火灯き 大年の秋 國風
 素白細きおよまのきく人よする件よ之を飾
 骨心指をたたく 糊は火灯守大年の秋よま
 きり削るもきくと職人くと細きおよまの
 上席して灯のよするの指替りてはさし
 ○固まの細きおよまの指替り指は田師あせ
 ちきよ切ぬ刀を細きおよまのてて神の灯
 指さ指をたたく 儀紙は行さぬはく

□ 素白大年の火灯上りて空くきさるよとせよ
 件よ之を他位の指をたたく 素白の儀紙は
 ますの備え衆あるおよまの近き一人の
 人使をよまのまのしはれと未教免のまの
 ちれいよまのまのまのしはれと未教免のまの
 氏神の指と固まのまのしはれと未教免のまの
 素白の儀紙はよまのまのしはれと未教免のまの
 柳の灯と素白の儀紙はよまのまのしはれと未教免のまの
 いせより儀紙はよまのまのしはれと未教免のまの
 素白の儀紙はよまのまのしはれと未教免のまの

■ 袖折合 素白の 肩衣 袴
 素白の儀紙はよまのまのしはれと未教免のまの
 袖と素白の儀紙はよまのまのしはれと未教免のまの
 肩衣と素白の儀紙はよまのまのしはれと未教免のまの
 袴と素白の儀紙はよまのまのしはれと未教免のまの

意上下意てある指。云々うすてへあ上
中下余下は言ふ舟あり船とて又その
舟とてよと傳はぬの船とありや。○國語の
人し其性なり

□ け夏も要とくくる彼扇 凡

余白人ニ君シテ拘お合志する肩衣白
とて夏卑下の情と迷うけ夏も要とく
彼扇と他臣の恨人々貴客の中も人
い思ひれなとも志と迷ふかたてけ
夏も亦彼扇の要くる他と迷ふ故人と迷
るお言あしむ固まる中の志と迷ふ空く月日
の傳へて教く志之彼れ政の指と迷ふ迷
ち教くあしむ○西二百一息はあり

□ おち油祢させて智月入る。 能

余白始来人の扇の要くるけ涼む体と
て草臥し用とけさうおち油祢させて志

月入るよ手作のおち油祢祢せし教又乃
ヤレくりよお天々を遊より思ふの足る候お
油の作舎は後おわかし味香の代とあると儉
約思ふつ古扇つりて行ける指と○固情と望
換る付は○おち油向をほ付れの要あり

■ 嘆声の隣の色と様侍 芳

余白お月入るは智教事鞠の身入て立出天
氣入る体とえちまよおちるさつとけく不喚声
の傳へをさ様侍と隣と世様侍つては喚
く空也と様侍と存くけて空くくをさつと隣
千金の膝と○國語涼む人の候は其れ満ち
喚せておち油祢せし中といささおひれと
涼むは候とくハ家おむの日知んあるそ

■ 涼くをさう後とくめ人お教 風

余白涼の人様侍と喚てある身とて呼止し体
ト又立圍の指とけさうハ教事又ぬ思するお

備の家は小用に出る者までい男儀は止
て空符す教と女房打ち又て天下降る
る文婦中の延^⑧れいさくても大甲あまを生るお
をさし捨^⑨める居てを^⑩後去のんを教ぢや
はくさるる指と△コクムレハ斤律文へ千カキハ三
甲一編屈正正△(無)位星采以正直小玉面は八瓶
用^⑪書許六日流字書ありの字△^⑫れいさく指と志
く^⑬き 辨白^⑭れいさく指する付い隣も七人
の教のすよ成て附札者も又嘆て教の容れ
指と去くめんといもむい^⑮た前へ候教あるをう
りか教は^⑯居りむささく許去は付札と字換一子
くむ^⑰冊^⑱儀より懸束る又は換束る懸束る人
ある戸を隔て教のさくもむい^⑲御あ

□ かちちあき車とあるる舎は盆 嵐業
あまさくめ^⑳教であすあ友の束て御あ付あ
社去くのん志は詞と又立又業と奉る指と付

くう^㉑答あき車とあるる舎は盆は^㉒後車^㉓所
又指を花も禁も^㉔許も^㉕性も^㉖合らぬを
う^㉗子車^㉘あき^㉙社あ^㉚わ^㉛性^㉜と^㉝か^㉞て^㉟ん^㊱あ
い^㊲酒^㊳あ^㊴は^㊵本^㊶さ^㊷る^㊸子^㊹あ^㊺と^㊻そ^㊼い^㊽ア^㊾そ^㊿て
そ^㊿後^㊽へ^㊼ち^㊽あ^㊾り^㊿い^㊽甲^㊾ぢ^㊿や^㊽は^㊼又^㊽教^㊾と^㊿ふ
似^㊽合^㊾る^㊿車^㊽い^㊼は^㊽は^㊼い^㊽ん^㊾あ^㊿ん^㊽人^㊾の^㊿流^㊽て^㊼ん
ホ^㊽て^㊼ん^㊽あ^㊾る^㊿と^㊽異^㊾な^㊿指^㊽△^㊾舎^㊿は^㊽舎^㊾い
ま^㊽ま^㊾舎^㊿は^㊽異^㊾律^㊿と^㊽利^㊾毛^㊿虫^㊽の^㊾乱^㊿車^㊽也
お^㊽之^㊾今^㊿製^㊽い^㊼花^㊽更^㊾後^㊿て^㊽古^㊾意^㊿と^㊽異^㊾△^㊾西
舎^㊽所^㊾の^㊿子^㊽は^㊼冊^㊽と^㊾く^㊿め^㊽ん^㊾あ^㊿る^㊽を^㊾い^㊿ぢ^㊽す^㊾は
け^㊽も^㊾あ^㊿る^㊽ぬ^㊾さ^㊿い^㊽く

■ 舎^㊿は^㊽舎^㊾い^㊿の^㊽形^㊾を^㊿車^㊽と^㊾て^㊽ま^㊾の^㊿古^㊽雅^㊾と
と^㊽や^㊾る^㊿件^㊽と^㊾又^㊽枝^㊾の^㊿指^㊽と^㊾分^㊿り^㊽コ^㊾ハ^㊿茶^㊽人^㊾の
あ^㊽は^㊾い^㊿伯^㊽と^㊾口^㊽加^㊾の^㊿客^㊽と^㊾知^㊿る^㊽死^㊾極^㊿湯^㊽出
教^㊽は^㊾こ^㊿も^㊽む^㊾と^㊽皆^㊾投^㊿と^㊽又^㊽ま^㊾竹^㊿の^㊽割^㊾下^㊿結^㊽も

初書障をさうさうの中舎は^⑧血まうらひ
 梳居て傷次ふたし持出々をさるゝ^⑨糸^⑩言
 の^⑪あれ^⑫信^⑬至^⑭る^⑮お^⑯好^⑰と^⑱書^⑲障^⑳さ^㉑る^㉒か^㉓を
 死木^㉔を^㉕さ^㉖ん^㉗と^㉘あ^㉙て^㉚勝^㉛る^㉜指^㉝之^㉞八^㉟盒^㊱は^㊲皆^㊳投
 互^㊴照^㊵つて^㊶又^㊷余^㊸の^㊹海^㊺ぬ^㊻と^㊼○^㊽固^㊾介^㊿は[㋀]房[㋁]書[㋂]あ[㋃]
 車[㋄]の[㋅]移[㋆]兵[㋇]換[㋈]多[㋉]下[㋊]結[㋋]と[㋌]房[㋍]車[㋎]は[㋏]人[㋐]あ[㋑]り[㋒]や[㋓]冊
 房[㋔]車[㋕]所[㋖]と[㋗]竹[㋘]下[㋙]結[㋚]と[㋛]雅[㋜]人[㋝]と[㋞]さ[㋟]う[㋠]は[㋡]モ[㋢]ト[㋣]
 又[㋤]あ[㋥]り[㋦]衣[㋧]被[㋨]て[㋩]付[㋪]ず[㋫]と[㋬]車[㋭]く[㋮]穿[㋯]ち[㋰]寸[㋱]全[㋲]件
 房[㋳]車[㋴]と[㋵]さ[㋶]あ[㋷]り[㋸]芳[㋹]さ[㋺]う[㋻]一[㋼]枚[㋽]の[㋾]多[㋿]と^㊀持^㊁余^㊂り^㊃
 □ 花^㊄は^㊅又^㊆今^㊇年^㊈の^㊉連[㊊]も[㊋]定[㊌]了[㊍]寸[㊎] 建[㊏]水
 余[㊐]の[㊑]返[㊒]の[㊓]房[㊔]書[㊕]と[㊖]て[㊗]二[㊘]月[㊙]の[㊚]余[㊛]を[㊜]と[㊝]思[㊞]ふ
 件[㊟]之[㊠]立[㊡]他[㊢]り[㊣]の[㊤]情[㊥]と[㊦]述[㊧]さ[㊨]う[㊩]花[㊪]と[㊫]今[㊬]年[㊭]の
 連[㊮]も[㊯]定[㊰]了^㊱寸^㊲ハ^㊳年^㊴と^㊵書^㊶せ^㊷り^㊸す^㊹雅^㊺人^㊻と^㊼も
 け^㊽む^㊾と^㊿連[㋀]透[㋁]と[㋂]も[㋃]未[㋄]人[㋅]の[㋆]道[㋇]も[㋈]あ[㋉]き[㋊]は[㋋]比[㋌]海[㋍]の
 下[㋎]未[㋏]目[㋐]も[㋑]白[㋒]ぬ[㋓]夜[㋔]の[㋕]時[㋖]候[㋗]多[㋘]れ[㋙]と[㋚]也[㋛]や[㋜]る[㋝]件
 と[㋞]一[㋟]白[㋠]の[㋡]上[㋢]は[㋣]所[㋤]あ[㋥]き[㋦]の[㋧]自[㋨]心[㋩]は[㋪]下[㋫]結[㋬]居[㋭]あ[㋮]の

振[㋯]ある[㋰]故[㋱]に[㋲]書[㋳]と[㋴]て[㋵]む[㋶]と[㋷]思[㋸]ふ[㋹]る[㋺]を[㋻]付[㋼]さ[㋽]う[㋾]の[㋿]文
 三^㊀人^㊁づ^㊂す^㊃寸^㊄の^㊅字^㊆深^㊇あ^㊈る^㊉む[㊊]世[㊋]匠[㊌]竹[㊍]下[㊎]結
 ち[㊏]く[㊐]と[㊑]雅[㊒]人[㊓]と[㊔]て[㊕]花[㊖]と[㊗]さ[㊘]う[㊙]指[㊚]と[㊛]付[㊜]さ[㊝]う[㊞]は[㊟]一
 翅[㊠]之[㊡]竹[㊢]と[㊣]い[㊤]花[㊥]と[㊦]思[㊧]ふ[㊨]思[㊩]ふ[㊪]あ[㊫]り[㊬]寸[㊭]

□ 雜[㊮]乃[㊯]被[㊰]と^㊱は^㊲る^㊳妻^㊴風^㊵ 相^㊶お
 余^㊷の^㊸我^㊹宿^㊺り^㊻花^㊼サ^㊽サ^㊾リ^㊿は[㋀]ま[㋁]す[㋂]今[㋃]年[㋄]の[㋅]飛[㋆]又[㋇]三[㋈]寸[㋉]
 連[㋊]も[㋋]定[㋌]了[㋍]寸[㋎]は[㋏]何[㋐]と[㋑]思[㋒]は[㋓]し[㋔]用[㋕]と[㋖]付[㋗]さ[㋘]う[㋙]雜[㋚]乃[㋛]
 被[㋜]と[㋝]降[㋞]る[㋟]妻[㋠]風[㋡]は[㋢]さ[㋣]う[㋤]と[㋥]花[㋦]の[㋧]降[㋨]は[㋩]張[㋪]存[㋫]
 て[㋬]降[㋭]る[㋮]と[㋯]よ[㋰]ま[㋱]の[㋲]内[㋳]文[㋴]の[㋵]末[㋶]て[㋷]三[㋸]寸[㋹]と[㋺]指[㋻]の[㋼]雜[㋽]乃[㋾]
 の[㋿]財^㊀は^㊁何^㊂あ^㊃る^㊄花^㊅と^㊆は^㊇お^㊈し^㊉き[㊊]う[㊋]と[㊌]サ[㊍]セ[㊎]ら[㊏]未[㊐]
 降[㊑]あ[㊒]り[㊓]三[㊔]寸[㊕]は[㊖]何[㊗]と[㊘]思[㊙]は[㊚]し[㊛]と[㊜]サ[㊝]セ[㊞]ら[㊟]未[㊠]
 り[㊡]と[㊢]思[㊣]ふ[㊤]ま[㊦]ぎ[㊧]り[㊨]の[㊩]む[㊪]い[㊫]に[㊬]あ[㊭]り[㊮]て[㊯]も[㊰]よ^㊱う
 ら^㊲む^㊳と^㊴指^㊵候^㊶あ^㊷る^㊸指^㊹糸^㊺必^㊻は^㊼通^㊽ぬ^㊾寸^㊿未[㋀]女[㋁]の
 子[㋂]を[㋃]述[㋄]さ[㋅]う[㋆]雜[㋇]の[㋈]被[㋉]は[㋊]る[㋋]白[㋌]思[㋍]ふ

終[㋎]の[㋏]注[㋐]終

	○	●	◻	◻	◻	◻	◻	◻	◻	◻	◻	甄	
五		二	二	二	一	二	七	七	七	五	昂	三	木
五二	一		二	三	五	尺	三	六	三	八	昂	二	木
五三	一	二	二		六	二	六	八	尺	尺	〇	一	決
五四	一	一	三		七	二	七	十	一	三			參
五五	一	一			五	二	五	十	七	三	昂	三	西
猿													
五	一		一		六	三	七	十	二	五	昂	一	考
五二		二	二		三	二	六	七	五	八	昂	二	市
五三	一	一	二	一	五	二	三	七	九	尺	〇	一	尺
五四		一			七	一	八	九	五	尺	昂	二	枳

ル

